



Anchor アンカー

プロテスタントの終焉か?

INSIDE

ニュースウォッチ 3

宗教改革500周年 9

信仰による義認 15

キリストは神か人か 24

セブンスデーアドベンチストの中にも

異教礼拝様式の侵入 28

サンライズミニストリーの働き 36



60号
2018年1月

巻頭言

2018年、新年おめでとうございます。アンカー誌も貧弱な小さなものから始まり、30年間、60号まで継続することができたことは、ひとえに神の恵みと皆様の祈りとご支援の故であることを深く感じ、神と皆様に心からお礼を申し上げます。

2017年もあっという間に過ぎました。振り返ってみると、様々な相矛盾するようなことが起きました。それらの諸事件は、聖書の預言を知らない人にとっては、どんなことでも一過性の事と思われているような気がします。**恐怖と不安**を煽る事件が次々起こる中で、一方では安心感と希望を与えるような報道がメディアで流されています。最近のドキュメンタリーで、近未来に一般人も海外旅行のように宇宙旅行の可能性があるという発言がありました。宇宙飛行の技術は驚くべきものです。

断続的に発射される北朝鮮のミサイルは、日本国内、いや世界の人々を脅かし、最も論議されている問題の一つです。シリアでの悲惨な事件がほぼ解決し、IS「イスラム国家」によるテロ事件は終わりかのように、思わせましたが、ISは拡散して、あちらこちらでテロ事件を起こしています。ダニエル11:40の預言は、これから熾烈な戦いに入ると解釈している聖書預言研究者もいます。これらの国家間の紛争は、最後に起こる善と悪の大争闘から人々の心をそらすものなののでしょうか。

世界支配を狙っている黒幕は、ヘーゲルの弁証法(正と反を作りそして統合する)により、わざと危機と混乱を起こして、「有利な立場」ができる一気に手を下そうとするのでしょう(大争闘下341)。自国民を守るという大義名分のもとに憲法を改正して核保有をするという世論を作り出す論理は日本をどこに向けていくのでしょう。

平和の使者と言われている、ローマ法王フランシスコは、緊張が高まる北朝鮮問題について「世界は破壊的な戦争の危機にさらされている」とし、自分の出番を待っているのでしょう。

聖書は、キリスト再臨の前兆の一つとして「**戦争と戦争のうわさ**」という表現をしていますが、「注意していなさい、あわててはいけません。それは起らねばならないが、まだ終りではない」とも言っています(マタイ24:6)。

一方では、**平和だ無事だ**のムードに浮かれている世界も見えます。エジプトで象徴される無神論が、急増していると言われています。特に、人間の知恵、技術に対する自信の故でしょう。

また、世界の**ソドム化**も否めない事実でしょう。ちょうどノアの時の様相を呈しているのではないのでしょうか。ニュースに出てくることは氷山の一角で、神の言葉はちょうどノアの時のように…「食い、飲み、めとり、とつぎ」、それは「いっさいのものをさらって行くまで」続くのでしょう。

自然災害の頻発、エキュメニカル運動、凶悪な殺人事件、暴虐等々…

何よりも教会内の背教が嘆かれます。SDAは古代イスラエルの轍を踏むと預言者は言っています。最後のテスト日曜休業令、再臨の切迫感は薄れていく。ある牧師曰く「確実にバケツに一滴、一滴と水は落ちていく。いっぱい溢れる時には、遅すぎる。目を覚まして準備せよ!」と。初代文集455を読んでください!

「ある村に、ヒツジ飼いの男の子がいました。来る日も来る日も、仕事はヒツジの番ばかり。男の子はあきあきしてしまい、ちょっといたずらをしたくなりました。そこで男の子は、とつぜん大声をあげました。

『たいへんだ! オオカミだ。オオカミだ』 村人がおどろいて、かけつけてきました。 それを見て、男の子は大笑い。

何日かして、男の子はまた大声をあげました。『たいへんだ! オオカミだ。オオカミだ』 村人は、こんども飛び出してきました。男の子はそれを見て、またもや大笑い。

ところがある日、本当にオオカミがやってきて、ヒツジの群をおそいました。

男の子はあわてて、叫び声をあげました。『オオカミが来た! オオカミが来た! 本当にオオカミが来たんだよ!』

けれども村人は、知らんぷりです。 なんともうそをいう男の子を、だれも信じようとはしなかったのです。

かわいそうに、男の子のヒツジは、オオカミにみんな食べられてしまいました」。

「現代は、すべての人間にとって、圧倒的な関心をそられる時代である。統治者や政治家たち、責任と権威の地位を占めている人々、あらゆる階級の心ある男女、一すべての者は、周囲に起こりつつある事件に注意を集めている。彼らは**国と国との間に存在する緊張した不穏な関係**を見守っている。彼らは地上のあらゆる要素に緊張が加わりつつあるのをみて、そこに**何か決定的な大事件**がいまにも起ころうとしており、**世界が途方もない危機の淵に臨んでいることを認めている**」教育212。



PROPHETIC 預言的 NEWS WATCH 時事ニュース

最大規模の事件が近づいている予告！

「神の抑制のみたまは今、世からとり去られつつある。暴風、嵐、火事、洪水、海陸の災害が次々と急速に起こっている。科学はこれらのすべてを説明しようと試みる。われわれの周囲に瀨繁^{ひんぼん}に起こっているしるしは、神のみ子の来臨が近づいた事を告げているのであるが、それは真の原因よりも他のせいにされている。人々は、神の僕たちが印されるまで風を吹かせないように、四隅の風をひきとめている見張りの天使たちを認めることができない。だが神が天使たちに風をゆるめるようにお命じになると、描写することのできないような争闘の光景が現れるのである」クリスチャンの奉仕70(ダニエル書12章、黙示録7章、16章参照)

「海陸の災害、社会の不安状態、戦争の警報などが危機をはらんでいる。それらは、最大の規模をもった事件が近づいていることを予告している。悪天使たちは勢力を結集して、陣地を固めている。彼らは最後の大危機のために強化されつつある。まもなくこの世界に大変化が起ころうとしているが、最後の運動は急速なものとなるであろう」同。

「全国各地の思慮深い、神をおそれる人がびっくりするような罪悪の流行の中に、わたしたちは生活している。このように流行している墮落は、とうてい筆舌につくし得ない。毎日、新しい政争、贈賄事件、詐欺行為が発覚する。また心を痛める暴動、不法、人間の苦痛に対する冷淡、さらに極悪、残忍な人命破壊の話聞く。また精神病、殺人、自殺も日々増加していく。サタンの使が人間の間に働いて、人心を迷わし、墮落させ、身体を汚し、破壊しようとして、ますます活動していくのをだれも疑うことができない」ミニストリー・オブ・ヒーリング・114ページ。

これらのキリスト再臨の前兆のニュースは、たとい毎月掲載してもしきれないほど枚挙にいとまがない。少しだけ取り上げてみる。

2017年はカリフォルニア州において史上最悪の森林火災の年であることが判明。そして、その地の現在の山火事が醸し出す終末的な光景

今年のカリフォルニア州では、断続的に山火事が発生し続けているが、その山火事による被害が、カリフォルニア州の歴史で最悪の被害となっていることがわかった。

12月12日のカリフォルニア州ベンチュラの光景



17人死亡、200人不明 米カリフォルニア州の山火事

2017年10月11日

現場はサンフランシスコ北部のソノマ郡やナパ郡など。2千棟以上の住宅や商業ビルなどが焼失した。火はなお燃え広がっている。州南部アナハイムのディズニールランドから二十数キロ離れた地域でも山火事が発生、住民数千人が避難した。(共同通信)

地元メディアなどによると、カリフォルニア州で17件の山火事が相次いで発生。



山火事により多くの家屋が焼け落ちた＝10月11日、カリフォルニア州サンタローザ。

とうとう 10 種類目の自然災害が発生

<http://www.y-asakawa.com/Message2011-2/11-message101.htm>



「米国の自然災害についてはこれまで何回かにわたって取り上げてきたので、読者は既に十分ご承知のことと思うが、**今年に入ってからの8ヶ月**を振り返ってみると、今回のハリケーン発生で、**自然災害の全てとも言える10種類の災害が全て出そろった**ことに気づかれるはずである」。

- ① 寒波
- ② 大雪
- ③ 竜巻
- ④ 火山噴火
- ⑤ 洪水
- ⑥ 熱波
- ⑦ 山火事
- ⑧ 砂嵐
- ⑨ 地震
- ⑩ ハリケーン

全裸でフレンチ！ パリ初のヌーディスト・レストラン開店 <https://gunosy.com/articles/RufCb>



仏パリ初をうたうヌーディスト（裸体主義者）向けレストラン「オー・ナチュレル」で食事を楽しむ人たち。動画より（2017年11月17日撮影、21日公開）。

【AFP＝時事】入店したら上着もズボンも、タブー。全部脱ぎ捨てようーフランスの首都パリに今月、本格的なフランス料理を全裸で食べられるレストランがオープンした。…

英ロンドン、豪メルボルン、東京と、世界各地に相次いで期間限定のヌーディストレストランが出店する。…高級フランス料理の3品コースを49ユーロ（約6500円）と手ごろな価格で楽しめるようだ。

「この誇り高い啓蒙の時代に、キリスト教会は真夜中の暗黒の中に横たわる世界に直面している。その世界はほとんど偶像礼拝に占領されている。エホバの律法がほとんど全世界で無視されて、この世界は急速にソドムとゴモラの町のようになりつつある」TM457。

オーストラリア、同性婚を合法化ー連邦議会で法案可決

2017年12月7日 <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2017-12-07/POKX4A6JTSF701>



Gay Rights Worldwide 世界のゲイ（同性愛者）の権利

- Gays can legally marry 同性婚の合法化
- Gays can have civil unions 同性愛の合法的
- No specific laws against gays 同性愛に反対の法律なし
- Laws limiting gays' freedom of expression 同性愛の自由に法的制限あり
- Homosexual acts criminalized with no penalty specified 同性愛行為は犯罪だが特別な刑罰なし
- Imprisonment for homosexual acts 同性愛行為は投獄される
- Death penalty for homosexual acts 同性愛行為は死刑



エキュメニカル(キリスト教一致)運動

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A1%E3%83%8B%E3%82%BA%E3%83%A0> ウィキペディアより。

カトリック教会においては第2バチカン公会議以降、エキュメニズム運動が全教会規模で盛んになった。この公会議においてローマ教皇パウロ6世のもとで『エキュメニズムに関する教令』が布告されており、ここで教会の交わりを妨げている障害が取り除かれた後に、すべてのキリスト者は聖体の唯一の祭儀の中で、単一有一の教会の一致のうちに集められると述べている。また、パウロ6世は正教会のコンスタンディヌーポリ総主教アシナゴラスとともに、1054年以来続いていた東西教会の相互の破門宣告を取り消している。カトリック教会ではプロテスタントのルーテル教会など諸教会との様々な対話や、宗教の枠を超えてイスラム教や仏教など世界の諸宗教との対話を行って

る。ドイツの教会会議は、キリスト教を超えて、諸宗派、諸宗教が一致した多元的な「世界エートス(社会集団)」を目的としている。

※注：エデンの園でエバと蛇の対話がどのような結果をもたらしたか？



バチカン第二公会議以降、カトリックとルーテル教会の50年にわたる対話の結果、1999年にカトリックとルー

テル教会は「信仰による義認」の教理で一致した。メソジスト教会もその4年後に調印して、ついに宗教改革500周年記念の運びとなった。セブンスデー・アドベンチストとルーテル教会との対話はどうなっているのだろうか。

世界教会協議会の指導者ら、教皇と会談

2017年9月4日

「クリスチャンの団結が不可欠」



世界教会協議会（WCC）のアグネス・アブオム中央委員会議長とオラフ・フィクセ・トヴェイト総幹事は8月23日、バチカン（ローマ教皇庁）で教皇フランシスコと公式会見し、今日、世界が直面する諸問題に真の意味での正義をもたらす上で、クリスチャンの団結が不可欠であることを話し合った。この会見では、エキュメニカル運動における相互の関係強化にも焦点が当てられた。

「安息日再臨派教会とルター派の世界連盟の間に建設的な神学の対話がありました。対話が1994年に始まって、そして1998年に終わりました」。 https://en.wikipedia.org/wiki/Seventhday_Adventist_Interfaith_Relations

キリスト教一致祈禱週間を準備したラトビアの教会、諸教派が協力

ークリスチャントウデイよりー

日本でも1月に行われたキリスト教一致祈禱週間を準備したラトビアの教会。「ルーテルやローマ・カトリック、正教、アルメニア使徒、バプテスト、アドベンチスト、ペンテコステ派、メソジストの諸教会や時には古儀式派の共同体の代表者たちまでもが参加する、エキュメニカルな祈りと祝祭に加えて、ラトビアにおけるキリスト教徒の一致はたいへい実際の協力という形をとる」と、同国のフリーランス・ジャーナ

リストで写真家のイバルス・クプチス氏は1月21日、世界教会協議会（WCC）の公式サイトで報じた。

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/18864/20160203/week-prayer-christian-unity.htm>



リガ大聖堂で行われたエキュメニカル礼拝（写真：カスパルス・ウプティス、2015年）



教皇フランシスコ、世界メソジスト協議会の使節を迎えて

2017年10月19日



教皇フランシスコは、世界メソジスト協議会の使節とお会いになった。

10月19日、バチカン宮殿で行われたこの出会いは、メソジストとカトリックの神学対話開始から50周年を記念して行われた。

教皇は使節への挨拶で、第2バチカン公会議は、「真理への愛と、愛徳と、謙虚をもった」対話を通し、諸キリスト教教会の信者間のより深い理解と正しい認識を広めるよう今も励ましていると強調。

わたしたちは長く離れた時を経て、再び出会い、互いを再発見し、心を開き合って共に歩めることを嬉しく思うと述べられた。

キリスト教と儒教の宗教間対話、WCCが初開催 韓国で5日間

2017年11月13日 - クリスチャントウディより -



世界教会協議会(WCC)が初めて開催したキリスト教と儒教の宗教間対話集会=10月27日、韓国ソウルで。

※注 世界宗教大連合へ向かい、そして世界統一政府へと向かうのであろう。

トランプ米大統領、エルサレムをイスラエルの首都と承認

2017年12月7日 <http://www.bbc.com/japanese/42261585>



ドナルド・トランプ米大統領は6日、エルサレムをイスラエルの首都として正式に認めると発表し、米国

の歴代政権が継続してきた政策を転換した。…古代からの長い歴史があるエルサレムの地位は、イスラエルとパレスチナが最も激しく対立する問題の一つ。イスラエルは発表を「歴史的」だと歓迎したが、国際社会からは強く非難する声が出ている。…

米国の発表を前にパレスチナ自治区ガザ地区では、同地区を実効支配するイスラム主義組織ハマスの呼びかけに応じた人々が抗議デモを行った。ハマスの近い地元メディアが報じた。

ハマスは、トランプ氏の発表によって、中東地域での米国施設にとって「地獄が始まる」と述べた。

※注：国連総会は21日に緊急特別総会を開いて、決議案は圧倒的多数の賛成を得て、米トランプ政権がエルサレムをイスラエルの首都と承認した問題で、国連総会が米国に撤回を求める決議案を採決。

さあ、どうなるだろうか。ダニエル書11:40の南の王が北の王(その同盟国)への挑戦を始めるのだろうか。アンカー46号「世界支配を狙う二大勢力」を参照。

2017年10月は、これはカトリックの、プロテスタントの、正統派の教会からの指導者たちと一緒に歴史的な会議となるであろう。今年²⁰¹⁷は運命の年である。我々は、イエスがヨハネ17章で祈られたように、神がキリストにある一致を呼び掛けていると信じる。…



この一致は、教義についてではなく、霊的な一致のことである。それぞれの多様な

グループの貢献を認識し、それが国家に傷の癒しとリバイバルをもたらすことができるのである！カンザスシティにおける2017年の会議は、相違を受け入れ、多様性を祝い、過去の傷を癒す助けのために諸宗派の指導者たちと一緒に橋を架ける年である。
<https://www.kairos2017.com/>

※注：黙13:3「死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」との預言が成就されつつある。



トニー・パーマによってフランシス法王と親友となったケネス・コーブランドは、聖職者たちの大集会で次のように言った：

「私の生涯で素晴らしい日の一つは、フランシス法



王と会えた日でありました。何という人物でしょう。彼は私の英雄の一人です。私はたった2日前に、主がこう言うのを聞きました。
2018年は聖霊と火の年

です

「私は神の権威によって神の預言者として召されました。ナザレのイエス・キリストみ名によって もみ殻に燃やしてください！燃やして…」



※注：黙示録 13: 「大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした」。マタ 24:11 「多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう」。

「平和の使者」と言われるフランシスコ法王の訪日整っているか？



2015年にフィリピンを訪れ、2017年バングラデシュ ミャンマーを訪れた。日本訪問を検討しているということであったが、2018年になるのだろうか。日本はザビエルの来日 1549年からイエズス会法王が訪日する用意は整っている感じである。遠藤周作の「沈黙」が映画化されヒットした。

それに加えてキリシタンの末裔である女性指揮者の西本智実さん率いるイルミナートフィルハーモニーオーケストラと合唱団が、カトリックの総本山バチカンのサンピエトロ大聖堂で行われた音楽ミサで公演した。今年はバチカンと日本の仏教界との宗教を超えた結末を象徴し、臨済宗相国寺派の有馬頼底管長が参列。…ミサは「バチカン国際音楽祭」の一環で、西本さんらの参加は5年連続となる。



かつて、200年以上の鎖国を経て、やがてフリーメイソンのペリー来航、そしてイエズス会は、国会議事堂の最も近く日本のブレーンを産出する上智大学を設立して、日本に幼稚園から大学まで最も多くの私立学校を設立している。日本でももうイエズス会に対して、カトリックに対して違和感を感じなくなって「有利な立場」が作り上げられているのではないだろうか。「教会は、ひそかに、そしてあやしまれないように、勢力を伸ばしつつある」(大争闘下 341) のは事実である。

ローマ法王の訪日「真剣に検討」 バチカン、来夏ごろか一産経新聞

安倍晋三首相は機会のある度にフランシスコ法王の訪日を期待すると述べてきた。

河井氏は法王フランシスコの早期来日を要請した。岸田外務大臣は、イタリアに続いてバチカンを訪れ、フランシスコ法王の訪日を要請した。2017年05月07日

<http://agora-web.jp/archives/2025919.html>
2016.7.29 <http://www.sankei.com/world/news/160729/wor1607290038-n1.html>

http://news.tv-asahi.co.jp/news_politics/articles/000070750.html



500年のカトリック対プロテスタントの対決は 間違っていたのか？ 宗教改革は失敗だったのか？

金城重博

ウィッテンベルク城教会で10月31日、プロテスタントとカトリックの両教会合同による記念礼拝が行われた。礼拝には両教会の指導者だけでなく、ドイツのシュタインマイヤー大統領やメルケル首相も出席した。メルケル首相の父はルーテル教会の牧師であった。世界各地のキリスト教関係国で祝賀会のイベントがあったようである。



スウェーデンにて



ドイツにて

マスコミでは、大きなイベントとして報じられなかったが、聖書の預言の研究者たちにとっては、非常

に意味のあることである。どんな重大な意味があるのかを考えてみたい。

14～15世紀ごろに起こったルネッサンスの翼に乗って、16世紀の初めに宗教改革が起こった。キリスト教会の腐敗をただそうとする宗教家らによって改革が始まり、暗黒時代と言われた中世時代のヨーロッパは夜明けを迎えることになる。その頃、西ヨーロッパにおけるローマ教会の権威は絶大なものであった。ローマ・カトリックの法王至上権は、言論の自由、出版の自由を抑えていた。ダニエル書、黙示録の預言では、その時代のことを指して「ひと時とふた時と半時」「1年と2年と半時」「1260日」「42か月」という表現を7回も使っている。預言の計算で1日を1年として、1260年の期間になる。

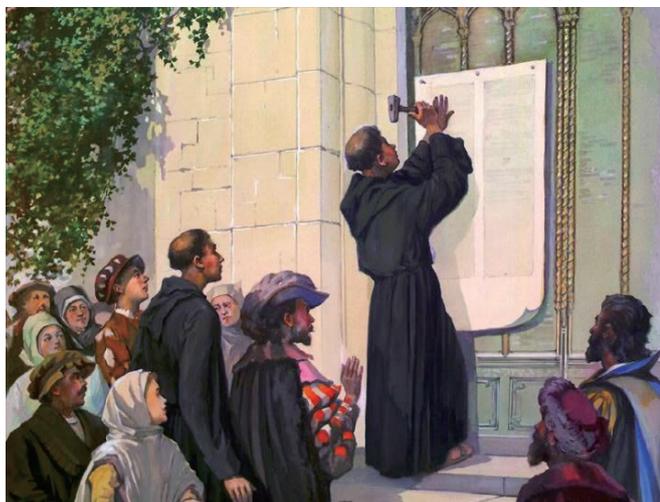
法王至上権の確立されたのは538年であった。そして暗黒時代が1798年に終わりを遂げたのは、ナポレオンのベルチエ将軍が、時の法王ピウス6世を投獄したことによった。ローマ法王権の失墜となった。しかし、その前にローマ法王権に決定的な打撃を与えたのは、ルターを代表とする宗教改革であった。

1517年に、マーティン・ルターがウィッテンベルクの教会のドアに95か条の提題をくぎで打ち付けた。彼は、大胆にもローマ・カトリック教会の非聖書的な教えに断固として立ち向かったのであった。

想像して見ていただきたい。ローマ・カトリックという巨大な体制に一人の男が立ち上がって抗議し、対決したことを！

この95か条の提題は、ドイツから始まり、極めて短期間に全ヨーロッパ、そして世界にまたたく間に広がった。人々は速やかにカトリック教会が推し進めて

きた非聖書的な教えと慣例を知って、ルターの側についた。活発な討論がなされるようになり、そして95か条の提題は人々を自分で考えるようにさせた。いった。



その頃は、ただ聖職者だけが聖書を持っていたので、人々は彼らを尊敬し、頼ることに慣らされていた。彼らは神の言葉を伝えてくれると思ひ、安心して彼らに任せていた。ルターは、95か条の提題と説教で、聖職者たちの慣例と教えは聖書の教えに調和していないことを明らかにしたのであった。いち早く2つの陣営が生れた。カトリック教会かルターの教えかという対立構図が出来上がっていった。

ルターが堅固な見解を守っていたので、ついに1521年4月、ルターはウォルムスにおける国会に召喚された。

そしてその教えのゆえに、彼は究極的に国会に出頭するように命じられた。

国会は規範に従って、彼が発言したこと、行なっていたすべてを放棄することを要求した。

それにもかかわらず改革者は答えた。「皇帝陛下と殿下方は、わたくしに簡単で明瞭で正確な答えを要求しておられますので、ここにお答えいたします。それは次のとおりであります。わたくしはわたくしの信仰を、法王にも会議にも従わせることはできません。と申しますのは、両者ともしばしば誤りを犯し、また互いに矛盾してきたということが明白だからであります。

それゆえ、私は、聖書からの証明、あるいは明瞭な議論によって、納得させられないかぎり、また、わたくしが引用した聖句によって納得させられないかぎり、そして、このようにして、私の良心が神のみ言葉によって義務づけられないかぎり、私は、取り消すこ

とができませんし、取り消そうとも思いません。なぜなら、キリスト者が良心に背いて語ることは、危険だからであります。ここに、私は立ちます。わたくしは、これ以外に何もできません。神よ、私を助けたまえ。アーメン」(D' Aubigne, book7, ch. 8. 各時代の犬争闘上192に引用)。

キリスト教徒の諸侯たちによる抗議

皇帝チャールズ(カール)5世はルターが宗教革命を止めることを望んだ。彼は、ローマ法王側の者たちを喜ばせるために、1529年にスパイレルの会議を召集した。ここにおいて改革者らがその教えを広めるのを阻止することが決められた。改革者らは、ミサに対決するため来ることが禁止され、カトリックは誰もルターの教えを受け入れてはならないことが決められた。

宗教改革に関して肯定的であったキリスト教徒の諸侯らは、議会の前に抗議を提出した。その抗議書とは次のようなものであった：

「われわれは、われわれの唯一の創造主、維持者、贖罪主、救い主、また、われわれの審判者となられる神、および、全人類と全被造物の前で、抗議を提出する。われわれは、われわれとしても国民としても、その法令の中で、神に反し、神のみ言葉、われわれの正しい良心、われわれの魂の救いに反することには、絶対に同意支持することはできない。」大争闘上251。

彼らは次のように書いた：

「この有名な抗議書に含まれた原則は、…プロテスタント主義の本質そのものであった。この抗議書は、信仰の問題に関する人間の二つの害悪に抗議している。その第一は、為政者の侵害であり、第二は、教会の独断的権力であった。プロテスタント主義は、これらの害悪の代わりに、政権以上に良心の能力を重んじ、目に見える教会以上に神の言葉の権威を認める。それは、まず第1に、政権が神の事柄に関与するのを拒み、預言者や使徒たちと共に、『人に従うよりは、神に従うべきである』と言う。それは、カール5世の王冠の前で、イエス・キリストの王冠を掲げる。しかし、さらに1歩進めて、すべての人間の教えは神の言葉に従うべきである、という原則を規定する。そればかりでなくて、抗議者たちは、自分たちが真理と信じることを自由に語る権利を主張した。彼らは、信じて従うだけでなく、神の言葉が提示していることを教えたいと望み、司祭や政権の干渉権を拒んだ。シュパイエル

の抗議書は、宗教的弾圧に対する重大な証言であった。そして、それは、良心の命じるままに神を礼拝する全

人類の権利の主張であった。

宣言は行われた。それは、幾千の人々の記憶に刻まれると共に、だれも消すことができない天の書に記録された。ドイツの福音派は、すべて、この抗議書を信仰の表明として採用した。各地において、人々は、この宣言に、新しい、よりよい時代の希望を認めた。諸侯の1人は、シュパイエル¹の抗議者たちに次のように言った。『どうか、力強く自由に、恐れることなく告白する恵みをあなたがたに与えられた全能の神が、永遠の日まで、あなたがたにそのようなキリスト者の堅実さを持たせられるように祈る』(D' Aubigne, book 13, ch. 6. 各時代の²大争闘上 252 - 253 に引用)。

「宗教改革擁護のために宣言された最も高潔な証言の一つは、1529年にシュパイエルの国会で、ドイツのキリスト教諸侯が提出した『抗議書』であった。これら神の人々の勇氣と信仰と堅固な態度は、その後の幾世代にわたって、思想と良心の自由を確保した。彼らの『抗議書』が、改革教会にプロテスタントという名称を与えた。その原則は、『プロテスタント主義の真髄そのもの』である」(D' Aubigne, 13 ch. 6. 大争闘上 243 に引用)。

唯一の権威の違い！

ルターと改革者らは、信仰と教えについて議論するとき、ただ聖書、聖書だけに従うべきであると主張した。他方、カトリック教会は、聖書と伝統に従うべきと言った。



ワルトブルク城にて執筆と新約聖書の翻訳がなされた。

ワルトブルク城で、改革者が書いた多くの小冊子がドイツ全体に配布された。そこは新約聖書をドイツ語に翻訳した山の要塞であった。

この時点で、カトリックとプロテスタントとの決定的な亀裂が生じたのであった。

カトリック教会は、ルターと改革者らは教会と国家の結論に従うべきであると言った。教会の権威と教え(伝統)に従うか、神のみ言葉を権威として従うかは、個人の自由な選択に任せることがプロテスタント主義であった。

迫害

改革者らがローマに屈服しないので、カトリック教会は迫害を始めた。今日は、非常に少なくなったが、古い歴史書にはぞっとするような迫害についての記録がある。多くの改革者らが非人道的な状況の下で刑務所に投げ入れられ、ある者たちはアルプスの寂しい場所に追放され、ある者たちは野生動物の餌食にされ、ある者たちは剣によって殺された。改革者らの多くが火刑を受けた。ヒエロニムス、フス、ティンダル…。ウイクリフの遺骨は死後40年以上も経過してから掘り出され、その骨は公衆の前で焼かれた。そしてその灰は近くの川に投げられた。中世時代-暗黒時代に殉教した者は8千万から1億とも言われている。

預言者ホワイトは次のように書いている：

「審判においてははっきりさせられるまでは決してわからないほどの規模の虐殺があった。…神のこゝろを聞いたことのない人々の間ではなく、キリスト教世界の中心とその全域において、幾百年の長きにわたってあらわされたサタンの徹底的残酷さを知ろうと思えば、ローマ・カトリック教会の歴史を見さえすればよいのである」大争闘下 326, 327。

プロテスタントとカトリックとが一つになることは、神の是認されることか？

アモス3:3にこう書いてある。「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだらうか」。

欽定訳では「ふたりの者が同意しなかったならば、どうして共に歩くことができようか」となっている。

聖書の教えとカトリックの教えがどう違っているかを少しばかり検証してみよう：

1. 聖書は偶像礼拝を禁止している。出エジプト20:4-5
カトリックは、イエスの像、マリヤ像、聖人たちの像を拜んでいる。
2. 聖書はすべての人は罪人であり、「義人はいない、ひとりもない」と教えている。ローマ3:10-12

カトリックは、法王無謬説、マリヤの無罪 無原罪 懐胎説を教えている。

3. 聖書はイエス・キリストだけが唯一の仲保者であると断言している。テモテ2:5

カトリックは、法王、枢機卿、司祭、神父を仲保者とし、マリヤも共同仲保者としている。

4. 聖書は、一度だけキリストは犠牲として十字架で死なれたのであって、聖餐式のパンと葡萄酒は単なる象徴であると教えている。ヘブル7:27

カトリックは、ミサが行われる度ごとにイエスが犠牲としてささげられると教える。すなわち、パンとぶどう酒が実際のイエス・キリストの体（聖体・聖体血）に変化するという教え（化体説）。

5. 聖書は、すべてのクリスチャンは祭司。キリストだけが神と人との唯一の仲保者と教える。1テモテ2:5。

1ペテロ2:5-9「あなたがたも、聖なる祭司」と教えている。宗教改革の一つの教えは「万人祭司」。カトリックは、祭司の階級制度を教えている。法王、枢機卿、司教、司祭、神父という制度は聖書に教えられていない。

6. 聖書は、旧約も新約も一貫して安息日、主の日は第7日であると教えている。出20:8-10、ルカ23:54-24:1。

カトリックは、聖書の安息日は第七日であるが、教会の権威によって、主が第一日に復活したから安息日-主の日を日曜日に変えたと教えている。

主キリストは、「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よくしておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」と教えている。マタイ5:17、18。

7. 聖書のみ、神のみ言葉のみが唯一の権威であると教えている。イザヤ8:20。

「敵が、習慣や伝説、あるいは法王の主張や権威に訴えたときに、ルターは、聖書、しかも聖書のみをもって彼らに対抗した」大争闘上154。

「聖書、しかも聖書のみ」が、プロテスタントの宗教であり、ローマから隔てている一大原則の一つであった。大争闘下170。

カトリックは、教会、あるいは伝統が聖書よりも上位の権威であると教えている。

8. 天父以外「父」と呼んではならない。マタイ23:9。

カトリックは、聖職者を「神父」と呼ばせている。しかも法王を「holy father - 聖なる父」と呼ばせている。

9. 聖書は、神のみ、キリストのみが罪をゆるす権威

があると教えている。ルカ5:24「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。マルコ2:7、イザヤ43。

カトリックは、神父に罪を告白するように教える。あるいはマリヤに告白する。

10. 聖書は万物の造り主こそ神であって、それ以外は偶像であると教えている。

「天を創造された主、すなわち神であってまた地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主はこう言われる、『わたしは主である、わたしのほかに神はない』」。イザヤ45:18、21、出エジプト20:1-17。

カトリックは、法王は「この地上の神」と教えている。少しの例を挙げよう：

・「我々はこの地上において全能の神の位置を占めている」レオ13世。

・「わたしは聖なる父であり、この地上における神を代表する者であり、キリストの代理者である。つまり、わたしは地上の神である」ピオ11世。

11. 聖書は靈魂不滅を教えていない。主にある信者は、キリストの再臨まで死は眠りであり、無意識であり、キリストの再臨の時に永遠の命に復活すると教えている。1コリント15章。1テサロニケ4:14-17。

カトリックは、信者はすぐ天国に行き、悪人は地獄、煉獄に行く

と教えている。悪人は永遠の責め苦にあわされると教える。

12. その他、カトリックには多くの非聖書的な教え、慣例がある。幼児洗礼、聖遺物礼拝、聖画礼拝等々…。

カトリックは、神の戒めの代わりに人間の戒めを教えとしている。マルコ7:7。

イエスは祈られた：「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」と。ヨハネ17:17。

つまり、真理によって一致するのであって、そうでなければ「聖別」、別れなければならない。誤りの教えの中にいると、自らの魂を滅びに追いやることになる。

使徒パウロは言った：「彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けられなかった報いである」。2テサロニケ2:10。

カトリックとプロテスタント、心霊術（唯心論

=spiritualism) の三重の合同の後に来るものは、迫害である。

詩篇 94:20 口語訳：「定めをもって危害をたくらむ悪しき支配者はあなたと親しむことができるでしょうか。彼らは相結んで正しい人の魂を責め、罪のない者に死を宣告します」。

新改訳：「おきてにしたがって悪をたくらむ破滅の法廷が、あなたを仲間に加えるでしょうか。彼らは、正しい者のいのちを求めて共に集まり、罪に定めて、罪を犯さない人の血を流します」。

ルターは、自分の確信を決して撤回したことはなかった！

トニー・パーマーは、ルターの説いた信仰による義認とカトリックの信仰による義認は同じであると強調した。

ルターは断言した：

「わたしは以前、法王はキリストの代理であると言った。今、わたしは、法王はキリストの敵であり、悪魔の使徒であると断言する」(D' Aubigne, b. 7, ch. 6. 各時代の^{大争闘}上 179 に引用)。

「法王の教書がルターのところに到着した時に、彼は言った。『わたしはこれを、不敬で虚偽のものとして軽べつし、排撃する。…ここで罪に定められているのは、キリストご自身である。…わたしは、最大の事業のためにこのような苦難に会うことを喜びとする。わたしはすでに、心の中に大きな自由を感じている。なぜなら、わたしはついに、法王が反キリストであって、彼の座はサタン自身の座であることを知ったからである』」(D' Aubigne, b. 6, ch. 930 各時代の^{大争闘}上 165 に引用)。

プロテスタントの変貌

「プロテスタント教会内の大きな信仰の差異は、どんなに努力しても一致を図ることはできないということの決定的証拠であると考え人が多い。しかし、ここ数年にわたって、プロテスタントの諸教会内において共通の教義を土台として合同しようとする気運が強く動き出している。このような合同を達成するためには、たとい聖書の見地からどんなに重要なものであっても、すべての者が一致しない問題点は、必然的に放棄されねばならなくなる。

1846年、チャールズ・ビーチャーは、ある説教の中で次のように言明した。『福音主義のプロテスタント諸派の牧師たちは、単なる人間的恐怖にはなはだしく打ちひしがれているだけでなく、根本的に腐敗した状態のもとに生き、動き、呼吸している。そして、常に、自分たちの性質のあらゆる卑しい要素に訴えて、真理については沈黙し、背教の勢力にはひびをかがめている。これは、ローマが行ったことではなかったか。われわれもまた、同じことをしているのではなからうか。そして、われわれは、前途に何を見るであろうか。それは、もう1つの全体会議、世界大会、伝道同盟、そして共通の信条ということである』。これが達成されるならば、その時には、完全な合同を確保するには、ただ1歩進んで暴力に訴えればよいのである。

「米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるその時に、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反対者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである」大争闘下 164。

「祈りをもって聖書を研究する時、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる。しかし多くの者は、自分では賢いと思っているために、真理に導かれるために謙遜に神を求めることの必要を感じていない。彼らは自分たちの進歩を誇っているが、聖書も神の力も知らない。彼らは自分たちの良心を沈黙させる何かの手段がどうしてもほしいので、最も霊的ではないもの、最も自尊心を傷つけないものを求める。彼らが願うものは、神を覚える方法として通用して、その実は神を忘れる方法である。法王制はこれらすべての欲求によくかなっている。それはほとんど全世界を包含する二種類の人々—自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にあって救われようとする者—のために用意されている。ここにその権力の秘けつがある。」大争闘下 330。

「カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たっていないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があったのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。なるほどカトリック教は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまったからである」大争闘下 329。

カトリック教会とプロテスタント教会の合同については、聖書に預言されていた！

黙示録 13章には、二つの獣が出現してくる。海か

ら上ってくる獣と地から上ってくる獣。その研究については、YouTube「アメリカについての預言」を見て頂きたい。ヨーロッパから台頭してくる法王権と小羊のような角を持つ獣、すなわち新世界にキリスト教国として現れてきたプロテスタント・アメリカ合衆国である。この二つの癒着。そして、黙示録 17 章には、「赤い獣に乗った大淫婦」。黙示録 16:13 ~ 16 には、**龍と獣とにせ預言者**の結合が描かれている。この三つは、黙示録 12 章の龍（サタニズム）、13 章のカトリシズムとプロテスタンティズムのことを指している。龍（サタニズム）はキリスト教化している心霊術—カリスマ、聖霊運動、セレブレーションの驚くべき発展を見よ。これらの三つの権力が世界支配を狙っていることが分かる。



アメリカでケネス・コーブランドが代表する聖職者たちの集まりで、フランシスコ法王の特使、トニー・パーマーは「プロテストは終わった！皆さんはみなカトリックです」と言ったとき、聖職者たちはアーメン、拍手喝さいで応答した。

預言者ホワイトは何と言っているか：

「サタンは、霊魂不滅と日曜日の神聖化という2つの重大な誤りを通して、人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる。前者は**心霊術**の基礎を置き、後者は**ローマ**との親交のきずなを作り出す。**合衆国の新教徒**は、率先して、心霊術と手を結ぶために淵を越えて手を差し出す。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この**三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじる**のである。

心霊術が現代の名ばかりのキリスト教をますますそっくりまねるようになるにつれて、それは人々をだまし、わなにかけるのに、いっそう大きな力を持つようになる。サタン自身も、近代的な形態に応じて姿を変える。彼は光の天使を装って現われる。心霊術を通して奇跡が行なわれ、病人はいやされ、否定することのできない多くの不思議なことが行われる。そして悪

霊が聖書に対する信仰を告白し、教会の諸制度に敬意をあらわすので、そうした霊の働きは神の力の現れとして受け入れられる」大争闘下 350-351。

ローマ・カトリック教会は変わったか？

「現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら隠し、世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし**教会は変わっていない**。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保持されている。最も暗い時代に案出された数々の教理は、今もなお支持されている。だれも欺かれてはならない。今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。その時神の民は、自分の生命の危険をおかして、この教会の悪を暴露するために立ち上がったのであった。教会は、かつて王たちや諸侯たちの上に君臨し、神の大権を主張した時と同じ誇りと尊大不遜な心を持っている。今日もこの教会の精神は、かつて人間の自由を押しつぶし、いと高き者の聖徒たちを殺した時と同じに残酷であり、専横である。



法王制はまさしく、預言の中でこのようになると言われているとおりのもの、すなわち終末時代の背教である（IIテサロニケ 2：3、4参照）。自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかし**カメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している**。『異端者もしくは異端の嫌疑ある者との誓約は守ってはならない』と教会は明言している。

1000年にわたるその記録が、聖徒の血によって書かれているこの権力が、今日キリストの教会の一部として承認されてよいであろうか」（Lenfant, vol. 1, p516、大争闘下 328 に引用）。

「ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない。」…

そして教会がもしひとたび権力を持つならば、過去の場合と同じ勢力をもって、その主義を行動に移すであろう。プロテスタントが日曜日をあがめる運動において、ローマ教会の助けを受け入れようと企てる時、彼らは自分たちのしていることがわからないのである。

プロテスタントが自分たちの目的の達成に夢中になっている間に、ローマ教会は、その権力を再び確立して、失われた至上権を回復することをねらっているのである。教会が国家の権力を用いたり、支配したりするような、また宗教上の制度が国家の法律によって強制されるような、すなわち、**教会と国家の権威**が良心を支配するような、そのような原則が米国にひとたび確立されるならば、この国におけるローマ教会の勝利は確実なものとなる。

神のみ言葉はこのさし迫った危険について警告を与えてきた。これが顧みられないならば、プロテスタントの世界は、ローマ教会の目的が実際に何であったかを知った時には、もはや手遅れになってそのわなを逃れることができないであろう。ローマ教会は黙々としてその勢力をのばしつつある。その教えは議会に、教会に、また人々の心に影響を及ぼしている。…自分が手を下す時が来たら自分自身の目的を押し進めるため

に、教会は、ひそかに、そしてあやしまれないように、勢力をのばしつつある。この教会が何よりも望むものは、**有利な立場**である。そしてこれはすでに教会に与えられつつある。われわれはローマ教会の真の目的が何であるかをまもなく見、かつ感じるであろう。神のみ言葉を信じ、それに従う者はだれでも、そのことによって非難と迫害を受けるであろう」大争闘下 340。

「ローマカトリック教会の中に真のキリスト者たちが多くいて…やがて多くの者が神の民と共に立つ」大争闘下 321。

「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」黙示録 18：4。

TOPIC

信仰による義認に関する カトリックとプロテスタントの違い ーセブンスデー・アドベンチストとの違いー

金城重博

序：

トニー・パーマーがケネス・コーブランドの率いる聖職者の集会に、フランシスコ法王の特使として来た。その時、彼は、「今や、ルーテル教会とローマ・カトリック教会が一致する時が来た、プロテスタントは終わったのだ、公式のカトリックの信仰による義認とルターの説いた信仰による義認は全く同じだ。私たちは今、同じ福音を宣べ伝えているのです。信仰による義認において一つであるなら、みなさんはみなカトリックでしょう。プロテスト（抗議）は終わったのです。会場に「アーメン」の熱狂的な応答が鳴り響いた。

コーブランドは感情を爆発させて、「チンプンカンプン」な異言を語った。そしてネットでフランシスコ法王に向かって「私の親愛なるお方、心からのお言葉を感謝します。私たちはこぞってあなたの懇願に答えます」と言った。歴史的なことであった。日本語版を

YouTube で見ることができるので必見。

カトリック教会とルーテル派教会が 1999 年に信仰



による義認において一つであることを認め調印したことを、聖職者たちは知らなかった。

パーマーは、7億人以上の人々を率いる福音主義のリーダーのグループをフランス王との昼食会に連れて行った。代表者には、コーブランド、ジェームス・ロビソン、ジェフ・トンニクフ（世界福音同盟会長）等々が名を連らねている。…そして、2017年10月31日に各国のキリスト諸教会で祝賀会が行われた。

プロテスタントは、カトリックは行いによる義認を教えていると思いをしていたと考えている人が多いようである。トニー・パーマーが言ったように「恵みによって、信仰によって義認され、その結果良い業、行いが作り出される」と言うなら、何も対立することはないのではないが、キリストの祈りにある一致の実現の時が来たと思っている。コーブランドは、この500年間の分裂は悪魔の仕業であったと言った。

カトリックはあまりにも巧みな言葉を用いているので、プロテスタントは、見分けることができなくて同意し一致宣言をした。

この欺瞞は聖霊によらなければ見分けることができない。

E.G. ホワイトはカトリックの権力の秘訣について次のように言っている：

「法王制はこれらすべての欲求によくかなっている。それはほとんど全世界を包含する二種類の人々—①自分の功績によって救われようとする者と、②罪の中において救われようとする者—のために用意されている」大下330(強調点筆者の挿入)。

1. 「信仰による義認」に関するプロテスタントとカトリックの違い：

① 今や、言葉上は全く同じであるが、中身が違う。両方ともエペソ2:8「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である」を引用し、「ただ、恵みによって信仰によって、義認され、信者に働く聖霊は善い行いを作り出す」と言う。

この問題は「どうでもいい」ことなのだろうか？

「『聖書、聖書のみ』から逸脱したこと（離れたこと）が、『信仰のみによる義認』から逸脱する結果に導いていった。マルチン・ルターにとっては、信仰

による義認こそ、**教会が立つか倒れるかがかかっている教理であった**」。What Martin Luther Says: An Anthology, ed. Ewald Plass, 3 vols. (St. Louis: Concordia, 1959), vol. 2, p. 704, W. 5.

「全ての魂はこう言うことができる、『キリストの完全な服従によって律法の要求は充たされた。私の唯一の希望は私のために完全に律法に服従したもうた私の身代わり、私の保証であるキリストを仰ぐことにある。彼の功績（いさおし）への信仰によって、私は律法の刑罰から自由である。彼は私をその義をもっておおい、律法の要求に全て答えたもう。私は永遠の義を持ちたもうキリストにあつて (in) 完全である。彼は人間の業によって織られていないしみなき衣をまとった私を神に提示される。すべてはキリストのもの。すべての栄光、ほまれ、尊厳は世の罪をとり除く神の小羊に帰せられる。』」(信仰による義 21, 22 ページ)。(ISM396. 1)

神学的表現はよく詭弁が用いられるが、少し我慢して頂きたい。カトリックの信仰による義認についての考えを二つばかり挙げてみる：

クリフォード・ゴールドスタイン Advent Review 編集長の言葉を引用しよう：

「カトリック教会の教理問答によると、義認は、罪の赦し、聖化、そして内なる人の再生を含む。義認は、信者の中に、そして外に何が起こるかというものである。キリストの完全なその生涯にもたらした功績、律法への完全な服従が、信じる人に帰するだけでなく、ローマ・カトリック教会の秘跡（ sacrament ）によってその人の内に実際に『注入 (infuse)』される。人間の中に起こる変化に功績がある。ローマ・カトリックは『信仰によってのみ義認されることを説くなら、呪われよ』とトレント会議で宣言した。それは今日も変わってはいない。

プロテスタントの『恵みによる義認』は、神の側の一方的、法的宣言である。我々の内に変化が起こるプロセスというのがカトリックの教えである。

JDDJ(義認教義に関する共同宣言)は、…言語が非常にあいまい(不明瞭)で、液体のようで、つかみにくいもので、同じ言葉を使いながら、違った内容であることは否めない。例えば「ただ、恵みによるのであり、我々の側には何の功績もなく、神によって我々は受け入れられる」という。まことしやかである。トレント会議以来、我々を救うのはそれであると言いつづけている。言葉上プロテスタントとそっくりである。言い換えると言葉のゲームである。

カトリック教会は、キリストと聖徒たち、またマリヤの善行という功績の宝庫を持っているので、罪の刑罰からのゆるしを受けるためには、巡礼を続け、お金

を払い続けなければならない。信者は洗礼、秘跡、告白が救いには不可欠である。

ローマ・カトリック制度の決定的な概念は、キリストが成されたこと、また成されることは教会そのものを通してくるということである。つまり、救いは、すべて神の恵みにより、キリストのみによって与えられるが、それは、教会とその秘跡と司祭制度によってのみ忠実な信者に与えられるということである。

これが反キリストと呼ばれる所以である。「反キリスト (antichrist) とはキリストに反するというだけでなく、『キリストに代わる (キリストの代理者)』という意味もある。

プロテスタントの真の信仰による義認、聖書の義認を受け入れると、カトリック制度は完全に崩壊するであろう。 <http://archives.adventistreview.org/2000-1525/story1.htm>

聖霊によって成される善行には価値、功績があるので、神に受け入れられるためには、生きている間にも死んでからも救われるためには善行に励まなければならない。すでに赦された罪に伴う罰から免除されるために煉獄という教理が生まれたのである。つまり、煉獄で徳を積み天国に入れるということである。

● 「永遠の生命は確かに神の哀れみと愛による無償の賜物と、カトリックは信じる。それはキリストの死によってもたらされたものである。しかし、神は彼を愛し、彼に仕える者たちに報いとしてそれを約束されたが、我々が神の恵みを通して良き業を行うことは真に天において栄光を勝ち取る 功績がある…」。

「徳が信者の良き業に先立ち、伴い、続く。それなくして決して神に喜ばれないし、価値がない—義認された者に欠けるものは何もないし、神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り、神にあってなされたこのような業は、もし恵みの状態のうちに彼らが死ぬなら、やがてきたるべき永遠の生命を獲得するのに真に 価値があるものである…」。

「プロテスタントはしばしば、カトリックは彼らの良き業は、救い主イエス・キリストにでなく、彼ら自身の 功績のせいにする」と信じている。これは事実ではない。カトリックはいかなる生来の行為も永遠の救いを受けるに価するものではないと信じる。我々は一人の仲保者イエス・キリストの 功績なくして、また彼の贖いによってすべての者のために勝ち取った神の恵みなくして天国のために何も成し得ないのである。『われらの力は神から来るのである』 (コリント第二 3 : 5)。『わたしから離れては、あなたがたは何も成し得

ない』 (ヨハネ 15 : 5)。すべての良き業は聖霊の働きの結果であり、彼と協力する我々の意志の結果である。『神の恵みの故に今のわたしがあるのである。』 (ハンディーカトリック辞書質問箱 [カトリックの教理を説明している] 331, 332, 333) 。

● スティフェン・キーナン 著、Doctrinal Catechism, P138, 139 に、信仰による義認についての質疑応答が書いてあるが、「信仰による義認についての勘違いは、プロテスタントの信仰による義認についての無知」によると記されている。

質問：罪人は善行によっては、義認の恵み (恩寵) を得ることはできないと結論づけていいですか？

答え：罪人は、砕けた悔いた心から出た善行によって義認の恩寵を得ることができます。なぜならこれらは必要な性質と条件であるから。しかし、彼自身のどんな行いも、義認の恩恵にふさわしいものとすることはできません。

質問：善行に価値を与えるのは何ですか？

答え：我々の内にある 聖化の恵みです。

質問：この聖化の恵みは我々自身のものですか、それとも神からのものですか？

答え：それは、神からの無償の賜物です。

質問：聖パウロは、この問題に対して何と言っていますか？ (ローマ 5:5)

答え：「神の慈愛が我々に与えられる聖霊によって心の中に注がれるのである」と言っているのです。

質問：聖化の恵みがもたらす結果は何ですか。

答え：それが 我々を神の友、子とするのです。(※神に受け入れられる)

「カトリックは、理論では、人の内に働く神の働きに頼るように人に教えてはいるが、実際は人間自身の行為に頼るように導くものである。プロテスタントは、聖霊の力によってもたらされるいかなる 行為も功績 (価値) あるものとすることを認めない。ルターは人間の性質の罪深さと不完全のゆえに、最高の聖徒の最高の善行も汚れたものであると教えていた。『すべての善行は、神の憐れみによって赦されない限り罪である』と。Paul Althaus, The Theology of Martin Luther, p 149.

簡単に言うと：

カトリックの信仰による義認とプロテスタントの信

仰による義認との違いは次のとおりである：

1. カトリック：信者に神の恵み、聖霊、義が「注入されて」生ずる良き行いだから、その善行には価値がある＝功績がある。
2. プロテスタント：何のいさおしもない罪人が神の憐れみによって、イエス・キリストを信じる信仰によって義と認められ、義認された信者の心に働く聖霊による良き行いでさえも功績はない。

プロテスタントは、善い行いを否定はしないが、正しい位置、順序に置いた。人が義認され、受け入れられるのは、キリストの、我々のための完全な生涯と身代わりの死であり、そこに神に受け入れられる根拠があるとする。

「宗教儀式や祈り、讃美や悔悟の念から来る罪の告白は、香のように真の信者から天の聖所へと上っていく。しかし、人性という汚れた通路を通して捧げられるこれらのものはあまりにも汚れているため、血によって清められない限り、神にとって価値あるものは決してなり得ない。上っていても汚れのない純潔なものではないので、すべて神の右に座しておられる仲保者の義によって提示され清められない限り、神に受け入れられるものとはならない。地上の幕屋から立ち上る香りはすべて、キリストの血という清めの滴りでぬらされていなければならない。彼は天父の前でご自分の功績の香炉を持っておられる。それは地上的な汚れのないものである。この香炉にご自分の民の祈り、讃美、告白を集め、これにご自分のしみのない義を加えられるのである。それから、キリストの和解の功績で香りをつけ、神のみ前に全く満足されるものとして香が立ち上っていく。それから、恵みの答えが返ってくるのである」(1SM344)。

「私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります」(キリストへの道 130)。

「彼が義を得ることのできるただ一つの方法は、信仰によることである。信仰によって彼は、神のみ前にキリストの功績を持っていく。すると主は、御子の従順（服従）を罪人の勅定書に入れられる。キリストの義が人間の過ちの代わりに受け入れられ、神は悔い改めて信じる魂を許し、義とし、彼が義であったかのように扱い、御子を愛するように扱い、御子を愛するように愛される。このようにして義とみなされるのである」(スタディーバイブル新 332)。

「信仰によって彼は、神のみ前にキリストの功績を持っていく」とは、王の行為を得ようとして、普通は

何か持っていきが、あまりに貧しくて何も持っていけない人の方だということである。「御子の従順（服従）を罪人の勅定書に入れられる」というのは、我々の口座は、何も無い、かえって赤字という口座に誰かが入金したようなものである。

悔い改めにも、信仰にも功績はない (CEv, 51 1SM361)。これも神の賜物である (ローマ 2 : 4)。

ルターは、神に受け入れられるために、自分の内にもっと悔い改めを、もっと信仰を、もっと徳を求めようとした。しかし、失望に終わった。律法の要求を満たしうるものは自分の内にはなく、自分の外にあるキリストの義だけだという大真理を悟ったのである。

ルターは信仰による義認をはっきり理解していた。E. G. ホワイトによると、ルターの義認と対照して、カトリックは、やはり行いによる救いを説いていたことが分かる：

「ルターがあれほどはっきりと教えた、信仰による義認という偉大な教理は、ほとんど姿を消してしまっていた。そして、善行によって救いを得るというローマ教の原則が、その代わりになっていた (大争闘上 321)。

ルターもウエスレーも「生まれながらの悪」「生来の心の悪」を抑制しようとあらん限りの努力をしたが、絶望の淵に追いやられた (大争闘上 142, 143)。しかし、信仰による義認の大真理を発見して宗教改革に立ち上がった (大争闘上 322)。

2. 現代のカトリックは変わったのだろうか？

否、否である！「ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない」(大争闘下 340)。

「自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している」(大争闘下 329)。

「恵みによって、信仰によってのみ義認され、良き行いを



作り出す」といかにもルターと同じことを教えているように見えるが、プロテスタントをだまし、一致させるための欺瞞である。

「誤りと混ぜられた真理は、それが純潔無垢のように見えるだけに、いっそう危険であり、それはすべて誤りであるのと等しい」。H.A. アイアンサイド

もう一度引用しよう：

「法王制はこれらすべての欲求によくかなっている。それはほとんど全世界を包含する二種類の人々—①自分の功績によって救われようとする者と、②罪の中にあつて救われようとする者—のために用意されている」(大争闘下 330)〈強調点筆者の挿入〉

カトリックは、信仰による義認においてルターとは同じことを教えていないことがはっきりしている。

3. 変化はカトリック教会にではなく、プロテスタント教会にあったのである！

「カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たつてはいないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があつたのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。なるほどカトリック教は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまつたからである」(大争闘下 329)。

なぜ、プロテスタント教会は、その真相を見抜くことができないのだろうか？

「プロテスタント諸教会は世の関心を求めたために、誤つた愛がその目を見えなくした」大争闘下 329。

カトリックの列聖式で人間法王を神としたり、聖人の功績を称えて列聖式を行うことは、全く聖書に反することである。「ヨハネ・パウロ二世は、1978年から2005年までの26年間の在任期間中に482人を聖人に列し、マザー・テレサを含む1327人を、聖人の前段階である福者に認定(列福)した」。http://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/16/090700333/

「人を称賛する者は、サタンに使われている手下である。キリストのために働く者は、自分をほめることばを避けなければならない。自己を見えないところにしまおう。ただキリストのみを称賛すべきである」(キ実 142)。

福音のチャンピオンであつたパウロは、何と言っているか？「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこ

の世にきて下さつたという言葉は、確実で、そのまま受け入れるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである」1テモ 1:15。

1. カトリックは、「時と律法を変えた」ダニエル 7:25。第一日安息日礼拝、十戒の第二条を削除。
2. 多くのプロテスタントは、十戒は十字架で廃されたと教え、ある教会は、十戒は重要ではあるというものの第七日安息日には礼拝しない。パウロは、無償で与えられる神の義を説きながら、律法を軽視することに強く反対し、次のように言っている：「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」ローマ 3:31。

カトリックとプロテスタントの義認の違いをまとめると：

① カトリックは神の恵み、義、徳を「infuse- 注入」して義認される。

② プロテスタントは、キリストの義にのみ頼つて来る罪人を今まで罪を犯さなかつたものとして神は受け入れ、義と認めてくださると信じる。キリストの義、罪のない義を着せてくださる(放蕩息子の父が上着を着せたように)。

“impute” 着せる、転嫁、帰せる、勘定書(一万タラントの借金者が無償で王にゆるされたように一マタイ 18章)

ルターは、自分の内ではなく、自分の外に「キリストの義、完全な服従」を見出し、それを神の前にもって行って受け入れられる大真理を見出した。

③ カトリックは、聖霊によってなされる善き行為には功績があるとした。

聖霊+私→善行=功績がある。

④ プロテスタントは、聖霊によってなされる善き行為にも何の功績もないとした。キリストだけが永遠にわたつて、「我らの義」であるとした。

聖霊+私→善行=功績がない。

「私どもを救うのはイエスの功績であつて、私どもを清めるのもイエスの血であります」(キリストへの道 130)。

「人の努力だけでは無価値以外の何ものでもない」

(1SM381)。

1888年のメッセージをまとめた、リチャード・ルーケン M.D の言葉は実に適切な表現だと思う：

「我々の無 (nothingness) に対して、神はすべて (everything) であったし、常にそうである」(全地をその栄光で照らす光 p1)。

4. プロテスタントとセブンスデー・アドベンチストの違い：

① アブラハム、パウロ、宗教改革者たちも基本的には同じであった。ルターは、イエスの罪なきご生涯と一度だけご自身を贖罪の犠牲として十字架に死なれたことが信仰による義認の根拠であり、カトリックの化体説は全く非聖書的であると説き、イエス・キリストのみが唯一全能の仲保者であると説いた。彼の信仰による義認の教理は、天の聖所（第一の部屋）を背景にして説かれた。

● 言葉上は、非常にカトリックとよく似ているが、どんなに後の雨（聖霊の満ちし）によって品性が完成されても、それには何の功績もないということを覚えていよう。

「信仰による義認とは何か？それは人間の栄光を塵にして、自分自身では何もできない人間に代わってなされる神のみ業である。人間が自らの無価値 (nothingness) を見るとき、彼はキリストの義が着せられるように備えられるのである」(信仰によって生きる 112 英文)(詩 103:14, 115:1。黙 14:7 参照)。

② セブンスデー・アドベンチストには、もっと深い意味がある。

セブンスデー・アドベンチストは、天の至聖所を背景に、最後の贖いという意味で信仰による義認が説かれる時が来たのである。それが 1888 年のメッセージであった。それは、後の雨をもたらし、大いなる叫びで世界に永遠の福音を宣べ伝えさせるものであった。

ある人は、1888 年のメッセージは、我が教会が律法主義に陥っていたので、ジョーンズとワゴナーによって宗教改革者らの信仰による義認のメッセージが回復されただけだと言う。

「主は大いなる憐れみのうちにワゴナー及びジョーンズを通して、ご自分の民に最も尊い使命を与えられた。その使命は、上げられた救い主、全世界の罪のための犠牲をさらに顕著に世界に示すものであった。それは、保証人であられるキリストを信じる信仰を通し

て与えられる義認を提示した。それは神の全ての律法への服従に表されるキリストの義を受け入れるように民を招くものであった」。

「多くの人々は、イエスを見失っていた。彼らはイエスが神であられること、イエスの功績や、人類家族へのイエスの不変の愛に注目する必要があった。人々に豊かな賜物を分け与え、弱い人間の器にご自身の義という高価な賜物を与えるために、一切の権能がイエスの御手にゆだねられている。これこそ神が世界に与えよと命じられたメッセージである。これが大声で宣布されるべき、三天使の使命であって、神の御霊の大いなる注ぎが伴うのである」(牧師への証 91,92)。

「ミネアポリスにおいてワゴナー兄弟のもたらしたこれらのメッセージは、人間の唇から聞いたことのない初めての明瞭な教え」であったと言われている。(Ms. 1889)

1888 年のメッセージを要約すると：

① 罪のための犠牲をさらに顕著に世界に示すもの。ということとは、キリストへの道、11 頁を見ると分かる。

「私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」。

「神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することができるよりもっと高い。『それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい』(マタイ 5:48)。この命令は約束である…。クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである」(2 希 20, 21)。

クリスチャン品性の理想は、キリストに罪がなかったように、生きて主の再臨を迎える信徒の完成された罪なき状態である。それは、至聖所における「最後の贖い」の神のご褒美である(大争闘下 398)。

② 神の全ての律法への服従に表されるキリストの義を受け入れるように民を招くもの

従って、1888 年に神が与えられた信仰による義認のメッセージは、カトリックの虚言とは全く違う。そもそも彼らは、「時と律法を変え」た。「罪の中にあって救われようとする者も OK」と説くと靈感の書は言っているのであるから、明らかに反キリストである。

プロテスタントは、十戒は十字架で廃された、律法に完全に服従する必要はない、必要はあっても、聖

書の第七日安息日を守る必要はないと教えている。

●ここではっきりすることは、聖書から、プロテスタントの信仰による義認のメッセージを完成するのは、「女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証を持ち、イエスの信仰（欽定訳）を持つ聖徒たち」であることが分かる！黙示録 12:17、14:12。

●第三の天使は、すべての人を天の聖所の至聖所に向ける。なぜか？大祭司イエスは、今至聖所におられるからである。プロテスタントよ、今更どうしてローマに目を向けて、エバのようにだまされるのか！

ルターは、ローマ・カトリックは「反キリスト」であり、「もし地獄があるならば、ローマはその上に建っている」と言った。「この巨大組織は、サタンの生んだ一大傑作であって、自分の意のままにこの地上を支配しようとする彼の努力の記念碑である」と言われている（各時代の抗争闘上 44）。

至聖所で完全に成就する義認 靈感の言葉に耳を傾けよう：

「キリストは、ご自分の民のために、完全に十分な許しと義認だけでなく、彼らが、ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められるのである」（大争闘下 216）。

これは、イエスの至聖所における最後の執り成しを描写しているところである。英語では、”full and complete”と表現している。両方とも同じ意味であるが、「十分に、いっぱい、満ちあふれる、全部、完全に」という意味である。

キリストへの道 82 頁に分かりやすく説明されている：

「キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことの無いものとして受け入れられるのであります」。

これは、パウロの言う義認という意味である（ローマ 4:3）。「働きはなくても、不信心な者を義とするか

たを信じる人は、その信仰が義と認められるのである」（ローマ 4:5）。これを義認=ゆるし=着せられる義、転嫁される義とも言う。

どの時点で、我々は神の前に義認されるのか？

「キリストの恵みは功しもなく、自分から要求しなくても、罪人を自由に義とする。義認は完全で十分な罪の赦しである。信仰によってキリストを受け入れる瞬間に罪人の罪は赦される。キリストの義が罪人に転嫁されるので、彼は神の赦しの恵みをもはや疑うことはない」（信仰に生きる 116）。

- ① これが、キリストが我々のためになさる偉大な働きである。しかし、キリストの働きはそこでとどまらない。同時に聖霊は我々の内に恵みの業をなさる。
- ② 「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く（行う、活動する、実践する）信仰だけである」ガラテヤ 5:6。行いが伴わない信仰は死んだ信仰で、我々を救うことはない。しかし、その行いに功績があるのではない。

E. G. ホワイトは次のように言っている：

「こればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいませ。そのときこそ『わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである』（ガラテヤ 2：20）ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、『語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中であって語る父の霊である』（マタイ 10:20）と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業一正しい行為、つまり服従をするようになるのであります」（キリストへの道 82、83）。

続いて言っている：

「ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るころはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを

通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります」(キリストへの道 82、83)。

これを聖化と言う。

救いの方程式：この二つは不可分である。

- # 1. キリストが我々のためになされる働き (for us)
- # 2. 聖霊が我々の内になされる働き (in us)

ここまではカトリックの表現と何ら変わらないように見える。

しかし、注意しなければならないことは、キリストを仰ぐ代わりに、自分の内になされる聖霊の働きに目を向けると、中世時代の主観的経験、神秘的神学に陥り、自分の欠点、罪が見せられ、聖化を感じなくなり、失望してしまう。ルターは、それに悩まされたのである。キリヤン経験の初めから終わりまで # 1 に目を向けることから喜びと平安と確信が来るのである。多くの者がキリヤンになったら、自分の欠点だけに目をとめて、キリストから目を離すことでペテロが

海に沈んだような経験をする。

キリヤンの天路歷程において、初めに経験した信仰による義認の経験を保持し続けることが大切である。これが聖化である。自分は他よりも清いという意識でなく、キリストの純潔さを見れば見るほど、パウロのように「罪人の頭」であると言えるようになるはずである。しかし、彼は「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」という確信を持ち続けた。

「人が義認を保持するためには、愛によって働き、魂をきよめる生きた活動的な信仰による継続的な服従を必要とする」(1 SM366)。

信仰による義認について、プロテスタントよりさらに深い理解！

「数名の人たちから手紙で、信仰による義認の使命は第三天使の使命ですか、と尋ねてきた。わたしは『それは第三天使の使命そのものです』と答えた」(1 SM372)。

ある人は、1888年のメッセージは、我が教会が律法主義に陥っていたので、ジョーンズとワゴナーによつ



チャートをよく観察していただきたい。

- ・キリヤン生活は「信仰に始まり信仰に至らせる」ローマ 1:17。
- ・「彼らは、悪の一つ一つに打ち勝つために、またキリストによって着せられる義 = (義認) によって正しい品性を完成するために聖なる努力を払っていません」青年への使命 15。つまり義認に始まり、義認で品性が完成される。
- ・なお深い悔改め、なお深い信仰へ、そして「罪人の頭」という意識に導かれる。

て宗教改革者らの信仰による義認のメッセージが回復されたのだと言う。宗教改革者らは第三天使の使命を持っていただろうか。否、否である！

「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』(黙 14:12 欽定訳)と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返した時に、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがな お与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。これは、キリストを信じて死んだすべての人を含んでいるが、彼らは神の戒めに関する光を受けなかったために、知らずして戒めを破って罪を犯したのである。わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所に入る時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである」(初代文集 415)。

セブンスデー・アドベンチストにも二種類の人： 至聖所における罪の除去と信仰による義認の完結！

最後の天の審判において、イエスは、我々の悔い改めと信仰を示して、彼らの赦し＝義認を主張なさり、ご自分の義の衣を着せて、父なる神の前に「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会」として立たせてくださる(エペソ 5:27)。

① 罪が消し去られる時、天の記録からも、我々の心の記録からも永久に除去される。

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない」(エレミヤ 50:20)。

「彼らの罪はキリストの贖罪の血によってぬぐい去られていて彼らはそれを思い出すことができない」(あけぼの上巻 220)。

そればかりではない！

② 神ご自身の思いからも完全に永遠に消し去ってくださるのである。

「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」(エレミヤ書 31:34)。

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめ

ない」(イザヤ書 43:25)。

③ さらに、「わたしの律法を彼らのこころに与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」ヘブル人への手紙 10:16)。

これが新しい契約の完全な成就である(大争闘下 217)。これこそ信仰による義認の完全にして十分な成就である(大争闘下 216)。

E. G. ホワイトはゼカリヤ 3 章のコメントに次のように言っている：

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願する時に、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。…さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に2度と汚されることはないのである。…今や彼らは、誘惑者の計略から永遠に安全なものとなる」(国と指導者下 196)。

着せられる義＝義認であることに留意してほしい！生ける神の印を受けた 144,000 は与えられた義を誇ることは決してない。自分たちの内になされた恵みの業を意識しない。

プロテスタントは、裁きの時にも自分の無価値さ、罪深さ、弱さのゆえに、ただ神の憐れみに頼る以外にないと信じる。キリストが我々のために生きられた罪のない生涯、身代わりの死という功績に頼るのみである(国と指導者下 193)。セブンスデー・プロテスタントは至聖所における調査審判、最後の贖いという福音が与えられている。彼らは、知っている罪にすべて勝利している者たちだが、何の功績も神の前に提示できなくて、なお心の純潔を懇願する。彼らのためにすべての罪が除去される(同 196)。恵みの、聖霊の最後の働き、罪の除去を経験する。罪のない状態にされるといふ驚くべき奇跡を経験する(大争闘下 397)。それでも彼らは、決して、決して自分たちの内にある善を意識し、功績があるとは思わない。永遠にわたって、「キリストが我らの義」である。天国に行っても、次のように言うであろう。「主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありませんか。あなただけが聖なるかたであります」(黙示録 15:4)。

罪が除去され、生ける神の印を受けた人たちが、自分にはもう罪がない、完全になったと主張するなら、また、ルシファールの罪を犯すことになる。ルシファールは、自分の内に善がある、正しい意志がある、従って神に依存しなくても生きられる、神から独立して命があると思ったことから最初の罪が始まったのである

(完全主義の神学)。

至聖所で、最後の贖いで完全にされた人は、完全主義者ではない!!! 完全主義は中世時代のカトリックの神秘主義であり、自分の体験、# 2に目を向けて、平安がない。これはセブンスデー・カトリックである。

最後に、及川吉四郎牧師の言葉を引用しよう：

「聖化の目的は、栄化への備えにほかならず、その備えの完結は、至聖所における罪の除去、言い換えれば完全到達ということですが、それもまた義認同様、神の一方向的恩寵による以外の何ものでもないわけです。それがわかったとき、私は長い間つづいていた救いに対する不安、懸念、心配は、完全に一掃されたの

でした。

重ねて申し上げますが、我々が入信時に与えられた義認、これは十字架上でキリストから天国への救いを保証された泥棒が、罪以外何のいさおし(功績)もない身でありながら、神の一方向的全くの恩寵による救いであつたように、最後の義化、『罪なき完全の達成』も、やはりわれらの努力や功績によるのではなく、全くの神の一方向的恩寵によるものなのです」(人類救済の神の計画とその象徴的模型としての聖所 p150)。「こんな恩恵、こんな幸いがほかにあるでしょうか。…神のさばきにおいて、われらの罪が神によってきれいに消し去られるときの幸いと喜びは、どんなでしょう。まさにもう手を挙げ、万々歳を叫びたくなるほどのものにちがいません」(同 140)。

STUDY

キリストは神か人か

稲田 実
米国在住

本稿は稲田実先生が福音社編集長時代の1970年に当時の「使命」誌にアドベンチスト神学シリーズを連載し、その中の「キリスト論」をご自分で執筆なさり、四月号に掲載なされたものです。その後「キリスト論」が活字になったことがありませんので現在の「ライフ」誌に再掲載を希望されましたが、適当なスペースがないとのことで、本誌にでも掲載していただければと寄贈していただきましたものです。

キリストの神性、人性をどう理解するかということは、特にキリスト再臨待望者にとっては重要な問題です。

「神性と人性が神秘的に結合し、人と神がひとつになった。わたしたちが墮落した人類の希望を発見するのは、この結合の中においてである。」サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1890年7月30日

キリストは半神半人ではないと言われる。キリストは神なのか人なのか、キリストはどういう意味で神であり、どういう意味で人なのかという疑問は、キリストの人格について2000年間も問われ続けてきた問題であり、今も多くのクリスチャンの中に潜在する疑問であろう。

聖書にはキリストの神性、人性の事実に関する叙述はあるが説明がない。しかも「人間の限られた能力では、この不思議な神秘、すなわち神性と人性の二つの性質の融合を定義することはできない。それは決して説明することはできないのである」(SDA コメンタリー 7巻・904ページ、E・G・ホワイト注)。

しかし救いの計画の中核であるキリストの受肉の問題は、不可解なままで放棄してよいということではない。前述の預言の霊のことばのすぐあとに「それでも

人間は、神の性質にあずかる者となる特権を与えられ、このようにして、彼はある程度、この神秘に入ることができるのである」(同上)と約束されている。そればかりか、セレクトッド・メッセージ1巻244ページにホワイト夫人は「我々は悔い改めた心と学ぶ者の謙遜さをもってこの研究に当たるべきである。そうすれば、キリストの受肉の研究は隠れた宝を深く掘る探究者に報いるところの実り豊かな領域である」と励ましておられる。ここにアドベンチストとしてみ霊に導かれて神学する必要が生じるわけである。神は少なくともわれわれの救いに必要な真理は惜しみなく示して下さるという確信を持ってこの問題を探求してみたい。

キリストの二性の問題は何分にも複雑神秘的なテーマであって、一つずつ解きほぐしていくのが最もよいと思われる。そこで、いくつかの質問に答えながら進めてみよう。

キリストは神であられたか。

「言は神と共にあった」「言は神であった」(ヨハネ1:1)とされているように、キリストは神であった。預言の霊も「キリストは本質的にそして最高の意味において、神であった。キリストは永遠から神と共におられ、すべてのものの神、永遠に祝福されたおかたであった」(セレクトッド・メッセージ1巻247ページ)と証言している。

それでは一、

その神なるキリストはほんとうに人間になられたのか。

まさに「言は肉体となり、私たちのうちに宿った」(ヨハネ1:14)のであり、パウロが指摘しているように「人なるキリスト・イエス」(テモテ第一・2:5)になられたのである。前述のセレクトッド・メッセージ同ページに、「キリストは人性をとったふりをしたのではない。まさしく人性をとられたのである。彼は現実に人性を所有された。…彼はひとりの人間であると宣言され、まさに人なるキリスト・イエスである」と強調される。

しかし、本質的に神であられたかたが完全な人間となられたということは、人間の論理では、次の質問を呼び起こす。

キリストが人間になられた時、彼はもはや神ではなくなったのではないか。

答は厳然たるノーであって、キリストご自身が「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生まれる前からわたしは、いるのである」(ヨハネ8:58)と人間以前からの先在を断言しておられる。「彼(キリスト)は地上におられた間も神であったが、彼は神のみかたちを脱ぎ捨てられ、その代わりに人間の姿かたちをとられた。……彼は神であられた、しかし、彼は神のみかたちの栄光はしばらくの間放棄されたのであった」(SDAコメンタリー5巻1126ページ)。

しかし、人間の疑問は続く。

それでは、キリストは人間と全く同じ肉体をもたれたのだろうか。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ」(ローマ1:3)、われわれ人間が「血と肉と共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられた」(ヘブル2:14)。「イエスは、人類が4000年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムのすべての子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった」(各時代の希望上巻35ページ)。したがってイエスのもっておられた肉体は、われわれのもっている肉体と全く同じであった。

それでは、われわれと同じ肉体の弱さをもっておられたキリストは罪を犯されたか。

彼は「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」(ヘブル4:15)。「キリストは墮落した状態の人性をおとりになっても、その罪には少しもあずかれなかった。われわれはキリストの人性の完全な無罪性について少しの懸念ももってはならない」(セレクトッド・メッセージ1巻256ページ)。

それでは、キリストが罪を犯されなかったのは彼が神であったからだろうか。

いいえ、これこそ問題の鍵なのである。「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙をもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれたのである。彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、

永遠の救の源となり、神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである」(ヘブル5:7-10)。つまり、彼が人間と同じ肉の弱さにあずかりながら、なお罪を犯さなかったのは神として超人的能力を行使されたのではなく、神の特権に逃げこまれたからでもない。むしろわれわれ人間と同じように祈りと叫びと信仰によって、人間として全き者とされたのである。ホワイト夫人は「天の大君は人間の運命をひき受けられ、人間がもつことを許されているのと同じ能力をもって、人間が耐えなければならないと同じようにサタンの誘惑にたえられた」(セレクトッド・メッセージ 1巻 252 ページ)。

したがって「人としてキリストは、人性と神性とを結合する天来の電流によって、ご自分の人性が充電されるまで、神のみ座に嘆願された。世の人々にいのちを与えるために、イエスは絶え間ない交わりを通して神からいのちを受けられた。イエスの経験がわれわれの経験となるのである」(各時代の希望中巻 101 ページ)。

最後の一文は「イエスの経験が我々の経験となるべきである」とも訳すことができる。さらにホワイト夫人は英文サインス 1897 年 6 月 17 日号に「キリストは、その人性にあつて神の神聖な力を捉えられた。そしてこのことは人類家族のすべての人ができる特権である。キリストは人間が神性をもっていなければならないようなことは何もなさらなかった」と言っておられる。この一文はキリストの人格についてかなり含蓄の多い啓示である。その趣旨は明らかに、キリストはわれわれ人間にとって高嶺の花である神的超能力は一つもお用いにならなかったということである。もちろん、こう結論すると、それでは、キリストの数々の奇跡やふしぎなわざはどう理解したらよいかという反論が出てくるであろう。しかし、これに対しても聖書は十分に答えている。キリストの奇跡の最大のものは死人をよみがえらせたことであつた。しかし、これは聖書の記録によるとキリストのみの専売特許ではなかつた。ザレパテの女の男の子をよみがえらせたエリヤやシュネムの女の子をよみがえらせたエリシャを思い起こすだけで十分である。これはキリストに限らず、求めと必要によっては神のしもべ、人の子にも行使することの許された天来の力であつた。それでは、ご自分が3日後によみがえることを預言なさつたことはどうかという質問もあろう。しかし、これも数々の預言の幻を与えられた預言者、人の子がいたことを思い合わせると、やはり人の子一般にも許された天来の力といえる。それどころか、「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」(ルカ 2:52)といわれているということは、完全に人間としての成長と学習過程に従われたことであつた。マリヤをその最初の教師とし、まったく人の子として、かつて「ご自分の手で地と海と空とにお書きになつた教え(教課)を学ばれたのである」(各時代の希望上巻 61 ページ)。

キリストは自分が約束のメシヤであるということさえ、聖書の研究と 12 才の時初めて宮もうでをされ、白い衣をまとつた祭司が行なっている、厳粛な儀式や祭壇の上のいけにえの動物をごらんになって「一日ごとに、イエスはそれらの意味をだんだんはつきりさせられた。どの行為もご自身の生涯に結びつけられているように思われた。……ご自分の使命の奥義がだんだん救い主に開かれた」(各時代の希望上巻 73 ページ)のであつた。つまり、キリストはわれわれと全く同じ条件と手段によってのみ、ご自分の使命を見いだされ、また完全に遂行なさつたのである。けつして、天との直通電話があつて彼の果すべき役割について特別の通知を受け、それによって定められたメシヤの過程を台本通りに演じたのではない。もし受肉以前の先験的記憶ないしは特別の連絡によって自分がメシヤであることを自覚していたならば、サタンが荒野でイエスを試みた時に「もしあなたが神の子であるなら」という仮定法で3回も接近したことは全然意味がなくなってしまう。「もしあなたが神の子であるなら」という仮定法で迫つたことは、イエスがやはり我々と同じ人間として祈りと信仰と研究によってご自分がメシヤであることを信じるに至つたので、この人間的信仰を動揺させる余地があつたからである。これはなんたる驚くべき事実であろうか。世界を救うメシヤともあろうかたが、これほど危険な橋を渡られたとは。「すべての人と同じように人生の危険に会い、すべての人間と同じに失敗と永遠の損失をかけて戦いをたたかわれることをお許しになつた」(各時代の希望上巻 35 ページ)。もう、ここまで例証すれば、キリストがいかに人間になられ、いかに人間と運命を共にされ、いかに人間としてその生涯を完成なさつたかが判明したことと思う。したがって裏返しをすればこのことは、イエスがおできになつたことはわれわれでもできる可能性があるということを示している。いや、それどころかイエスは「わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう」(ヨハネ 14:12)と保証しておられる。

考えてみるとイエスはその生涯中、ご自分のことを「神の子」と呼ばれるよりも「人の子」と呼ばれることの方が圧倒的に多かつた。これはいったい何を物語っているのだろうか。これはとりもなおさず、キリストは「私はあなた方と同じ人間なんだ、人間になりきつたのだ」ということの強調に違いない。「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかつたが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」(ヘブル 4:15、16)。

キリストが徹底的に人間になりきられたという受肉

があってこそ、われわれも完全な生涯を歩くことができるという希望と具体策が開かれたのである。これこそ、福音の中核であり、福音そのものである。

しかし、それでは、キリストはいかなる意味で神であったのか。

キリストを人間として強調してきたが、それでは神としてのキリストはいったいどうなるのかという大きな疑問が残るに違いない。キリストは生涯中、大部分ご自分を「人の子」として強調なさったが、また「神の子」であることもお認めになり、また認められることを望まれた時点がいくつかあった。弟子たちに「……あなたがたはわたしをだれと言うのか」と問われて、ペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えたことはイエスを大いに喜ばせたとし、信仰告白の一大テーマでもある。そのほかにはあまり数多くないが、キリストご自身が「神の子」であることを認められたのはピラトの前であって、あの時はご自分を「神の子」として認めるのが一番不利な時であった。つまり、彼は「神の子」として責任をとらなければならない時に、ご自分を「神の子」として告白しておられる。結局、苦労は人間並み、責任は神としてという姿が浮き彫りになってくる。

確かに、キリストが神と等しいものとしての責任をもっておられなかったならば、十字架で払われた犠牲は、われわれの罪をあがなう効力をもたないことになる。

そこで、改めてキリストの「神性」とは何かということをもう一度考え直してみる必要が生じた。

キリストは責任者としては神と等しいものでなければならなかった。しかし、「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わ」なかったと言われている（ピリピ 2:6）。これは、どう解釈したらいいだろうか。キリストが責任者として地上生涯中も神でなければならなかったとすれば、彼は天におられた時から地上におられた時、さらに天によみがえられた間を通じて連続した一つの生命的存在でなければならぬことになる。そうであるに違いない。しかし、前述のようにキリストは神の能力と特権は「しばらくの間放棄されたのであり」、また天におられたときの記憶とも断絶をいったん経験なさったと考えられる。これらの事情ははじめにことわったように聖書に説明されているわけではない。しかし、その型は少なくとも第二の聖書に見ることができる。例えば蝶の一生を考えてもらいたい。彼らははじめは木の葉の上をはいまわる毛虫である。しかし、ある時期がくると蛹（さなぎ）になってからの中にとじこもり

微動だにしなくなる。しかし、一定の蛹の期間を経ると、彼らはその殻から開放されて大空に舞い上がっていく。彼ら蝶が自分たちの前身や前生涯を覚えているかどうかはわからない。しかし、彼らは毛虫の時代から蝶の時代まで、あれほど姿かたちや生態が変わっても、一貫した一つの生命体であることにはまちがいない。だから、キリストは父なる神に向かって「あなたは…わたしのために、からだを備えて下さった。…その時、わたしは言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました』（ヘブル 10:5-7）と言われて、不自由な蛹のような人の子の姿をおとりになったのである。

「神性」と「神聖な性質」

あかしの書の中に「彼の人性を通して神性がひらめいた」という表現がしばしばでてくる。これは、よくキリストが神の能力を瞬時現わされたようにとられがちである。しかしこのことについて、わがバシフィック・ユニオン大学の神学部長ウィリアム・ハイド博士はこういうふうに言われている。「神性」とは、二つのケースを除いては、ほとんど全部が、その文脈上、目撃者や罪深い人々の目に映じたイエスの神々しさであると言っておられる。したがって、これも、イエスが瞬間、神の立場にかえられたのではなくて、天来の電流によって充電された、「神聖な性質」によるものであって、けっしてすべての特権をもった神格の一位の方としての「神性」の誇示ではなかったのである。

誤ったキリストの神聖観

キリストを「神の子」として信受することは正しい。それが我々の信仰の土台である。しかし、われわれ人間とは違った超能力的な神格者として祭り上げることは一見信心深そうに見えながら、実はせつかく大きな危険と犠牲を払って人間に近づいてくださった救い主キリストの救いのわざを割り引いてしまうことになる。実生活の上でも、イエス様はどうせ、われわれとは違った存在のかたなのだから、完全にイエスに似ることはできなくても無理はないという言いわけと墮落に通じる。だから、このような意味で「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない」（1ヨハネ 4:2,3）と言わなければならない。

静まって、わたしこそ神であることを知れ。

詩篇 46 : 10



セブンスデーアドベンチストの中にも 異教礼拝様式の侵入

New Life Mission September-October 2016 より

訳：砂川満

アドベンチスト教会中の多くの団体内で起こっている新たな流れを見ると、従来の礼拝の境界線が、神が意図された本来の位置から離れて、どんどん押し広げられているように思われる。神は古代の民に、異教の慣例をとり入れることの危険について警告なされた。「あなたの子どもをモレクにささげてはならない。またあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である」(レビ 18 : 21)。神はイスラエルの子らに、異教の礼拝の手法や型を採用してはいけないと命じられた。カナンカナンの異教の神々(バアル、モレク、アシタロテ、ケモシ)の礼拝では、歌と踊り、火とドラム、絶叫などを含む、手の込んだ儀式が行われていた。それぞれの神を表す偶像にささげられた、供え物や祈りの祭壇があった。



テキサスのアーリントン SDA 教会における騒々しい歌と踊りのロックコンサート



ボルネア、キリバティアドベンチストの学校で火のダンス。昔は戦争に出るとき悪霊払いになされた。



フロリダのペテル SDA 教会でのヒップホップダンス

この異教の「礼拝」体験は、催眠術的、ゾンビのような作用がある。それにしても、生きたまま焼かれている自分たちの赤ん坊の叫び声をかき消し、同情心を全く抱かないということがあり得るだろうか？異教の礼拝は神の目に極めて忌むべきものであったため、イスラエルの子らのうち、自らの子供をモレクにささげた者たちは処刑された(レビ 20 : 2 参照)。

新福千年礼拝

異教の礼拝は、決して廃れていない。今日、新たな「精力的〔ダイナミック〕な」礼拝式が行われており、そこでは拍手をしたり、自発的に歌ったり手を上げたり、叫んだり踊ったり、といったことがなされている。大音量の音楽が鳴り響き、レーザー光線が飛び交い、照明がまばゆく輝き、プロジェクターが派手な画像や映像を映し出している。

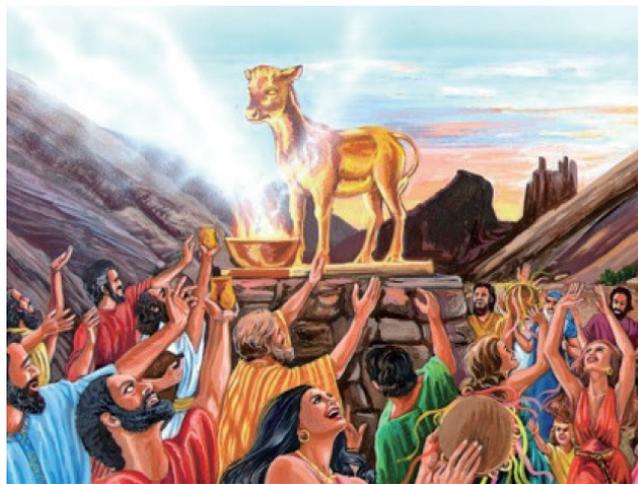
これらの新しい礼拝経験は、大音響で音楽が鳴らされ、浮かれた連中が恍惚状態で踊り騒ぐダンスクラブと何ら変わらないことが多い。これらの礼拝形態と経験は、何も新しいものではない。それらの起源は異教であり、聖書においてはバアル礼拝にまでさかのぼる。

私たちの教会での礼拝が世の娯楽と区別がつかないようになると、それはキリスト教よりも異教に近くなったということである。

金の子牛礼拝

モーセがシナイ山で神の律法、すなわち神の民を約束の地に備えるための律法を受け取っていたころ、サタンはそれを阻止しようと、自らの土台を据える仕事に着手した。神の御目的を挫折させるために、烏合の衆をとおして異教の礼拝を持ち込んだのである（出エジプト 32：7－8参照）。サタン礼拝の特徴、特質に注意していただきたい。「モーセは身を転じて山を下った。彼の手には、かの二枚のあかしの板があった。板はその両面に文字があった。すなわち、この面にも、かの面にも文字があった。その板は神の作、その文字は神の文字であって、板に彫ったものである。ヨシヤは民の呼ばれる声を聞いて、モーセに言った、『宿営の中に戦いの声がします』。しかし、モーセは言った、『勝どきの声でなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の声である』。モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りを見たので、彼は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた」（出エジプト 32：15－19）。

金の子牛の周りでなされた踊りと叫びは、ナイル川の雄牛の神アピス礼拝の模倣に過ぎなかった。



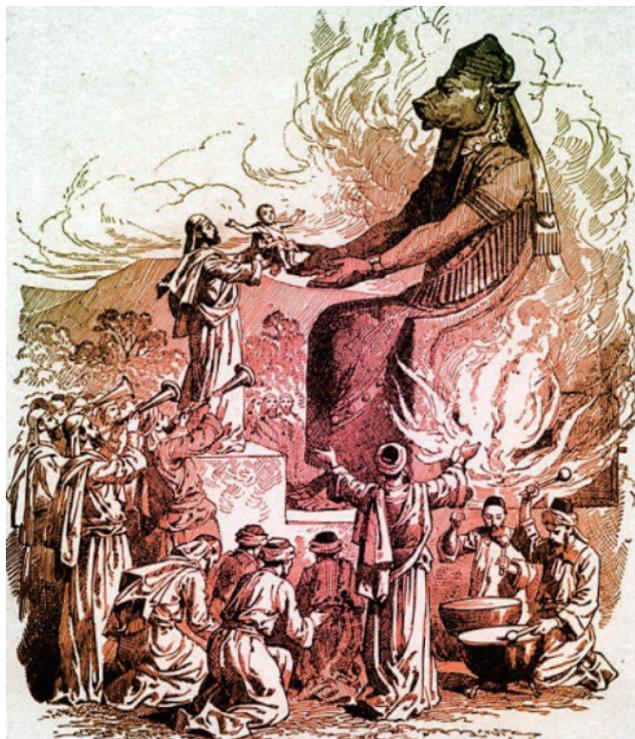
叫んで歌って踊って金の子牛礼拝

ヨルダンでの背教

「イスラエルはシッテムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらな事をし始めた。その娘たちが神々に犠牲をささげる時に民を招くと、民は一緒にそれを食べ、娘たちの神々を拝んだ。イス

ラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがったので、主はイスラエルにむかって怒りを発せられた」（民数記 25：1－3）。

「人類のあけぼの」に記されているが、イスラエルが二度目に偶像礼拝に陥ったこの時も、ふたたび音楽と踊りが偽の礼拝にとりいれられている。



バアルペオルでモレクに赤子を捧げる、ドラムと音楽で。

「歌と踊りに浮かされ、異邦の女たちの美しさに魅せられて、彼らは主への忠誠心を捨ててしまった。一緒になって歓楽に身をゆだねるにつれて、酒が感覚をくもらせ、自制心を失わせた。情欲がすべてを支配し、みだらな思いで良心を汚した彼らは、勧められるままに、偶像にひぎをかがめた。彼らは異教の祭壇に犠牲をささげ、最も堕落した儀式に参加した」（あけぼの下 67）。

カルメル山でのバアル礼拝

バアルの異教礼拝とエホバの礼拝との対比が、カルメル山上での対決以上に明快に記されているところは他にない。靈感の書は、この事実を明らかにしている。「バアルの信奉者たちの、熱狂的で無意味な狂乱さとは著しく対照的に、預言者エリヤの態度は静かである」（国と指導者上 120）。

バアルの預言者らは「祭壇のまわりに踊り、さらに「刀とやりで身を傷つけ、血をその身に流

すに至った」(列王上 18:26, 28)。そこには 450 人の預言者がいて、叫びながら踊ったり、とびはねたり、自らを傷つけたりしながらバアルを呼び求めている。異教礼拝の例にもれず、そこでもドラムをとり入れた音楽が奏でられていたはずである。



カルメル山でバアル礼拝歌と踊りと叫び

しかしながら、われらの真の神は、このような方法で礼拝するものではない。自らのいけにえと礼拝を受け入れてもらうために、エリヤは何をしただろうか？飛び跳ねながら叫び、踊っただろうか？否である。彼は単純に 12 個の石を積んで、神の祭壇すなわち神の本来の青写真を復元し、へりくだって祈った。すると神は、ご自分の従順で忠実なしもべに答えられたのであった。

異教の復興

21 世紀の礼拝における新興の風潮は、古代異教の伝統と酷似しており、このことが、セブンスデー・アドベンチスト教会の指導者らの間で白熱した議論を引き起こしている。私たちは、先代の人たちによって注意深く守られ、長年続いてきた伝統的な礼拝と音楽の習慣を維持するだろうか？それとも、退屈で元気がないとある人たちが考える、昔から変わらない礼拝に飽き飽きしているだろうか？活気があって、めいっぱい体を揺らして踊る、変化に富んで興奮に満ちた、もっと精力的〔ダイナミック〕な礼拝形式をとり入れるだろうか？ドラムやベースギターやキーボードを使った、うきうきするような礼拝を採用すべきだろうか？そういったロック・コンサートのような環境のほうが、もっと新世代に受けるのではないだろうか？

神を礼拝するやり方は、ひとつに限定され得ないと言明する人たちがいる。私たちがまじめに行っているならば、どんな礼拝を選択しようと、神は受け入れてくださる、といった主張である。もし私たちが、若者を魅了するのに何がベストかを追求し、それに基づいて、カッコいいバンドやダンスの演技をとり入れた礼拝形式を選んでいるとしたら、礼拝の真の意味を見失ったと言えるだろう。エレン・ホワイトは次のように述べている。「決して、改宗者を増やすために真理のレベルを下げてはいけぬ。かえって、罪深い堕落した者たちを、神の律法の高い標準へと引き上げるよう努めなさい」(伝道 137)。



2015 年、「沈黙のユダ」が世界総会でワシントンアドベンチスト大学が公式に踊りを披露



フィリピン、バタンガスでリパアドベンチスト高校による異教的踊り悪魔的音楽と土着民のドラム

ひたすら求めよ

「ひたすら求めなさい！」というのが、北アメリカのセブンスデー・アドベンチスト教会の祈りと礼拝の主要メッセージになりつつある。それが、若者

たちを教会にとどめるための政策になっている。

このプロジェクトのために年次総会が開かれ、そこでは、教会の代表者らが斬新な礼拝プログラムについて学び、それぞれの教会に戻って実施できるようになっている。それは北米中の若者たちを対象にした、教会経験を劇的に変えるための、潤沢の資金を使った、巧みに連携された試みである。それは、最上層部から承認され、新しい人たちを魅了するために練られ、若者たちの教会離れを防ぐための、大胆な訓練プログラムである。



ルイジアナ州シュリーブポートにある SDA 教会のラッピング牧師ことロドニー・ドラゴ牧師はフィラデルフィアでの説教中にラップとダンスを披露。

内在する疑問



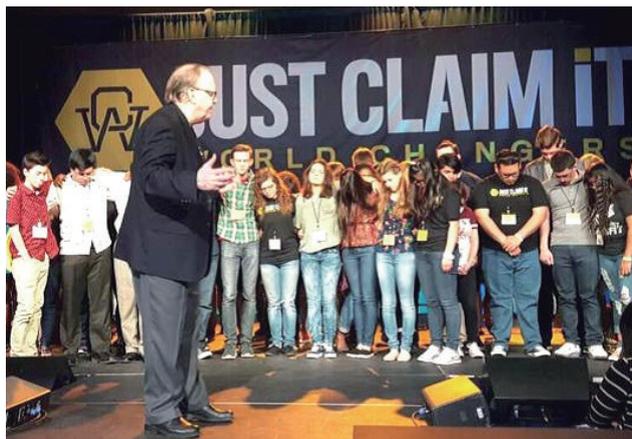
「ひたすら求めよ」Just Claim It は、北米の SDA 支部が主催するキャンペーンであり、青少年を教会に従事させ続けるように設立。

実際に礼拝されているのは、誰なのだろう？ 私たちは、礼拝者の願望に訴える礼拝体系を実施すべきだろうか？ それとも、礼拝されるお方の希望を重視すべきだろうか？ 神は、何を要求しておられるのだろうか？

私たちが神にささげる礼拝と賛美は、決して、私たちが気持ちよくしたり、喜ばせたり楽しませたりするために意図されなかった。礼拝は本来、神を喜ばせ、崇め、神に栄光を帰するためのものである。みことばのうちに見られる、礼拝と賛美に関する靈感を受けた文や勧告を読むとき、神に栄光を帰するよりも、礼拝者を楽しませることを重視した、この現代の「礼拝」を、神が嫌悪なさるのは当然である。



「Just Claim It (ひたすら求めよ)」キャンペーンには、北米支部総理ダン・ジャクソン氏の祝福があった。



北米支部総理ダン・ジャクソン氏が「Just Claim It」イベントで祈る様子。

主の預言者を信じなさい

神があらゆる真理の唯一の土台であられる故に、神に受け入れられる賛美と礼拝を確立するにあたって、神だけが最終権威となる。私たちにとって、神の言葉だけが誤ることのない権威ある指針である。「あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう」(歴代下 20 : 20)。

終わりに近づくにつれて、私たちの礼拝が退廃していくことを、エレン・ホワイトは示された。「インディアナで起こっているとしてあなたが語ったことは、恩恵期間が閉じる直前に起こることを、主は私に示された。あらゆる奇妙なことが実演されるであろう。ドラム付きの音楽やダンス音楽とともに、叫び声があがるであろう。理性的な人間の感覚はあまりにも混乱してしまい、正しい決断を下すことができなくなる。そしてこれが、聖霊の活気づけと呼ばれるのである。聖霊は決して、このような方法、このような大騒ぎのうちにご自身をあらわされることはない。これは、現代の純潔で誠実な、人を高揚させ、高貴にさせ、清める真理を無効にするための、サタンのもっとも巧妙な方法を覆い隠すために、

彼が発明したものである。昨年1月私に明示されたことが、わたしたちのキャンプミーティングに持ち込まれるよりは、音楽を取り入れない礼拝のほうがましである。この時代のための真理は、魂を回心させる働きに、このような類のものを全く必要としない。大騒音は感覚にショックを与え、正しく行われていたなら祝福となったはずのものを墮落させる。お祭り騒ぎをするために、騒音を織り交ぜた悪魔的な力が、聖霊の働きと呼ばれるのである」(セレクトッド・メッセージ2巻36)。



「Just Claim It」運動は、現代音楽、照明、演奏のすべてを使用。通常のロックコンサートと何ら変わらない。



まるでクラブやロックコンサートのように作られた会場。観客に様々なビジュアル、照明、効果音でインスピレーション、感動を感じさせる。

これら現代〔コンテンポラリー〕の礼拝式が、感情主義とともに聖書的清めの真理にとって代わろうとしている。感情主義においては、聖書で述べられていることよりもフィーリングのほうが重要視される。

「昨年1月に私の前を横切った騒音や様々な音の混乱と聖霊は、全く無関係である。適切に行われていたら、神への賛美と栄光になったはずの音楽が、サタンの働きによって、騒音と混乱と化している。彼はその効果を、ヘビの毒牙として利用している。過去にあったこれらのことは、未来にも起こるであろう。サタンは音楽を、その演奏の仕方によって罠としている」(同上37-38)。

ドラムやダンスを伴う新しい現代の礼拝様式を押し進めている、これらの教会指導者や教会員たち

は、「では、未信者にどうやって伝道すればよいのか？」と論ずる。そこで、未信者に伝道する彼らの解決法というのが、教会に世の愛する方法を導入することによって、かえって教会離れさせることになる。これは決してうまくいかない、と、靈感の書は述べている。

「これらの実演のうちに、私たちが真理をもっていることを世に確信させるものは何もない。ただの騒々しさや叫び声は、清めの証拠にも、聖霊降下の証拠にもならない。あなたの熱狂的な実演は、不信者らに嫌悪感を起こさせるだけである」(同上35)。

ロック・コンサートの模倣

世の音楽産業は、可能な限り最高の娯楽を提供するために、彼らの生演奏舞台を完成させるのに、巨額を投じてきた。そしてこれが、自分たちの礼拝に大衆を引き寄せるために教会が用いている、市場活動の模範〔マーケティング・モデル〕なのである。ロック・コンサートの究極の目的は、聴衆のうちに強烈な幸福感を生み出し、何度もコンサートに足を運ばせて、金銭を消費させることである。しかし、ここではつきりさせようではないか：ロック・コンサートは、人々をイエスに向けさせるために設計されたものではない。ロック・コンサートは、私たちの心身を悪霊との交わりに導くために意図されたものである。肉欲的な音楽とイエスの歌詞をとりいれた興奮させる刺激的な雰囲気は、礼拝の経験を神聖にするわけでも、私たちが神に近づけるわけでもない。「主が礼拝に望まれるのは秩序と規律であって、興奮や混乱ではない。・・・興奮は、恵みにおける成長にとって、また精神の真正な純潔と聖化にとって好ましくない」(同上)。



環境を暗くすることで感情の深い感情状態を強めようと意図されている。

ロック・コンサートの注目は、演奏者に集中する。サウンドや照明や演出は、バンドに栄光を帰するために計画される。そして、かれらに注目が集まるの

である。バンドだけが視界に入るように、その他の全員が暗闇に覆われる。演奏者のすべての動きをカメラが追いかける。これはすべて意図的に行われるものであって、目的はアーティストに栄光を帰するためなのである。



技術者は、照明と音のレベルをコントロールして経験を強化し、より記憶に残るようにする。

周囲の環境は、暗闇と無秩序である。聴衆は演奏者から除外され、中には、巨大スクリーンでバンド演奏を視聴するだけの者たちもいる。暗闇の中では、「礼拝者」仲間の顔を見ることもできず、大音響のため、演奏者が発する音以外は全く聞こえない。

娯楽〔エンターテインメント〕の世界では、お金が神である。なぜなら、どれだけのチケットが販売され、会場でどれだけの関連商品が売れて、どれだけ儲かるかがすべての本質だからである。ロック・コンサートは人を楽しませ、そこに来る人たちに感情的な経験を与えるためにもくろまれている。そこでなされるすべての事は、そこに来る人たちが会場に足を運び続け、彼らの製品にお金を投じるようにするため、人々を喜ばせて興奮させるように意図されているのである。



ショーは続く。我々の大学の SDA 舞踊部である「Silent Judah (沈黙のユダ)」が、「Just Claim It」カンファレンスに参加する観客のために演奏する。

教会はなぜ、ロック・コンサートで行われていることを真似たいのだろうか？「多くの自称安息日遵守者にとって、音楽が偶像となっている。サタンは、若者たちの思いへの接近手段として音楽

を用いることができるなら、それに反対する理由をもたない」(1 T506)。



マレーシアのゾーミ・アドベンティスト・ユース・キャンプで礼拝中に若い女性たちが「スワロー・ダンス」を演じる。「中国のリボンダンス」と呼ばれるこの舞踊は、空気を通した長い絹の糸を旋回するダンサーで構成され、漢王朝 200 年にさかのぼる。ダンサーは自然から複雑な図やシーンをアニメーション化させる。



上と下：2013 年パンヨーロッパ・アドベンティスト・ユース・コンGRESで、若者と大人の両方が歌い、飛び、揺れ、踊る。



使徒行伝 2 章に、3000 人がバプテスマを受けて教会に加わったと記されている。当時公認の礼拝方式に留意されたい。「そこで、彼の勧めの言葉を受け入れた者たちは、バプテスマを受けたが、その日、仲間に加わったものが三千人ほどあった。そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。みんなの者におそれの念が生じ、多くの奇跡とするしとが、使徒たちによって、次々に行われた。信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。そして日々心一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」(使徒行伝 2 : 41 - 47)。

当時すでに異教の礼拝にとりいれられていたダンスやドラム、今日のロック・コンサートに見られる光景は皆無であった。初代教会の信徒たちは祈り、聖書のみことばを学び、社会奉仕と伝道にいそしんだ。彼らの礼拝は単純であったが、熱意にあふれていた。

前の雨が力強く降り注いでいて、幾千万もの人々が改宗した。一世代のうちに、福音は全世界に伝えられた！まさしく、御力の際立った実演をもって、神がご自分の民を導いておられた。1世紀をつうじて、礼拝と賛美はずっと一貫していた。ならば私たちは、この単純にして効果的なお手本を継続すべきではないだろうか？今日の私たちにとって、使徒時代の礼拝は物足りないのだろうか？人々を教会に留めおくために、あるいはもっと多くの人たちを加わせるために、異教に蔓延している習慣をとりいれなければならないのだろうか？断じてそうではない。神の方法は、人の方法よりもはるかに優れているのだから。



オークウッド・アドベントリスト・ユニバーシティ・チャーチ
チャールズ・ハンツビル、アラバマ州ドラム、エレクトリック・ギター、ベース・ギター、キーボードによる礼拝中のダンスと歌。

神は何をお求めになるか？

「しかし、わたしが顧みる人はこれである。すなわち、へりくだって心悔い、わが言葉に恐れおののく者である」(イザヤ 66：2)。

「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」(サムエル上 15：22)。

「あなたがたの新月と定め祭とは、わが魂の憎むもの、それはわたしの重荷となり、わたしは、それを負うのに疲れた。あなたがたが手を伸べるとき、わたしは目をおおって、あなたがたを見ない。たとい多くの祈をささげても、わたしは聞かない。



上：神の火である聖霊は、初代教会の一世代の間に世界中の人々に福音を授けるよう力を与えた。これは先の雨だった。後の雨はさらに大きくなり、神の民を封じ込めて天国のために準備させる。

下：奇妙な火、不潔な精神。霊的な異教、ロックミュージック、ダンス、感情主義によって多数の人々を引き寄せる。これは、反キリストと獣の印を受け取るように人々を準備するであろう。



あなたがたの手は血まみれである。あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ 1：14 - 17)。

「主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか。手が清く、心のいさぎよい者、その魂がむなしい事に望みをかけない者、偽って誓わない者こそ、その人である」(詩篇 24：3 - 4)。

もしもあなたがサタンの礼拝方式に関与しているなら、そこから出ることをお勧めする。「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」(黙示録 18：4)。

「わたしは、われわれは最後のあわれみの使命を持っていると信じている人々は、毎日新しい誤りを吸収している人々から離れることが必要であることを見た。わたしは、若い者も年を取った者も、彼らの集会に出席すべきでないことを示された。それは、魂に致命的な毒である誤りを教え、教理を教える代わりに人間の戒めを教える彼らを、このようにして奨励することは悪いことだからである。このような集会の影響はよくない。もし神が、このような暗黒と誤りから救い出してくださったならば、われわれは、神がお与えになった自由の中に固く立って、真理を喜んでいなければならない。

神は、われわれが、行かなくてもよいのに誤りを聞きに行くのを、お喜びにならない。なぜなら、意志の力によって人々に誤りが強いられているこれらの集會に、神がわれわれをつかわされるのでないかぎり、神は、われわれを保護されないからである。天使たちは、われわれを守護することをやめる。そして、われわれは、敵に攻撃されるままに放置され、サタンと彼の悪天使たちの力によって、暗くされて弱められる。そしてわれわれの回りの光は、暗黒によって汚される」(初代文集 230 - 231)。

「あなたが描写しているようなことがインディアナで起こっているが、主はわたしに、**恩恵期間終了直前**に起こることを示された。あらゆる異様なことが実演されるであろう。ドラム、ダンス音楽と共に、叫び声があるだろう。理性の持ち主の感覚で正しい決定をする事ができないほど混乱してしまうであろう。それが聖霊の働きであると呼ばれるであろう。聖霊は、決してこのような方法、騒々しさではご自身を現されない。これは純潔で、真実で、人を高め、清める現代の真理を効果のないものにするため、自らの巧妙な方法を隠すためサタンが考案したものである。去った1月に楽器を伴ってなされたような礼拝はしない方がいい。そのようなことが、私たちのキャンプ・ミーティングに持ち込まれるであろうということが示された。この時代の真理は魂を悔い改めさせるのに、このようなことは一切必要としない。騒乱は感覚に衝撃を与え、もし正しく使われたら祝福となるはずの音楽を歪めてしまう。サタンの使いの力が浮かれ騒ぎと結ばれる。これが聖霊の働きと呼ばれる」(1901年 2SM36)。



聖音楽より抜粋。

1900 年の音楽の背教

1900 年になって、インディアナ・カンファレンスの SDA 教会で信じがたいことが起こった。インディアナのいくつかの教会では、ドラムやさわがしい「大騒音」で「神」を礼拝するというものであった。主のしもべは、このような集會には聖霊でなく「サタンの使いたちがガンガンいう騒音、お祭り騒ぎと混ざっている」と言っている。1900 年と同じタイプのお祭り騒ぎのような礼拝が恩恵期間の終了直前に、アドベンチスト教会に持ち込まれることを予告し、強調された。教会内外の状態を見ると、私たちは今、まさにその時代に住んでいることが分かるのである。

騒音で礼拝する

次の預言を注意深く読むなら、驚き、震えおのくはずである。

インターネットでも
ご覧になれます。

毎週の説教動画、セミナー等更新中。
無料書籍も閲覧可能です。

サンライズミニストリー

Online Sermons



facebook

Sunrise Ministry | Facebook
<https://www.facebook.com/srsministry?ref=hl>

You Tube

Sunrise Ministry | Youtube Channel
https://www.youtube.com/channel/UC_MrvUh7GCW2yGpWmYNSGxA

写真で見る サンライズミニストリーの活動

一般講演会



沖縄県浦添市における聖書考古学講演



金城マーク N.D. による健康講演会



「創造か進化か」 山本哲也氏の講演



金城重博氏の一般講演



親慶原家の教会での健康講演会

音楽プログラム



男性四重奏 オヘルダビデ



ミックスコーテット



子供達の音楽伝道



バプテスマ



2017年 最後のバプテスマ 南部宮城島にて、11月11日



北部 サンライズ今帰仁教会



中部 仮庵の教会



南部 親慶原家の教会



讚美の家の聖書研究会

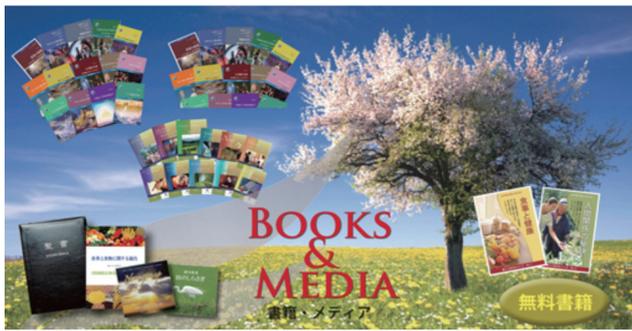


Zoomで聴覚障害者とのネット礼拝風景



サンライズミニストリーでは今年、
残り少なくなってきたスタディー
バイブルの増刷を予定しています。

サンライズミニストリー スタッフ&住人



読者からの声:

「キリスト教の歴史の様子が絵画と一緒に説明され、大変参考になります」。

「魅力のある書物を頂き、感謝!大切にさせて頂き、必ず完読いたします。
E.G. ホワイトさんは素晴らしい本を世に出しておられ尊敬しております」。

「目次を眺めるだけでも楽しくなります。熟読したいと思います」。



各時代の大争闘「歴史と聖書の預言」がこの3年間で
約1万5千冊配布されました。

また、今年も1万部増刷する予定です。

主の恵みと多くの皆様のお祈りとお支えに心から
感謝しますとともに、これからもよろしくお願ひいたします。

サンライズミニストリー 一同

創刊号 1988年2月発行
アンカーに寄せて / 自分で調べよ！ / 委ねられている使命
第2号 1988年8月発行
「完全」に対する不信 / 信徒からの声 / 人の性質 / 古代イスラエルと現代イスラエル / 神の信仰 / TV-現代の怪物 / 信仰から学ぶ教訓 / 重要でないことと重要なこと
第3号 1988年12月発行
1888年 - 勝利か敗北か？ / 信仰から学ぶ教訓 / アンカー堅固な土台 / 人の能力と才能 / 完全な品性に関する質問と反対 / 皆様に研究していただきたい宿題
第4号 1989年4月発行
キリストの性質 / 信仰から学ぶ教訓 / 人の創造 / レビ記にみる三天使の福音 / イエスの品性の美しさを仰ぎ見る / 1888年のメッセージとは何か
第5号 1990年3月発行
キリストの性質 / 信仰から学ぶ教訓 / 真理の宝石 / 瞑想 / 証の書の誤訳 / 通訳 / 最も重要な働き - 親業 / 時兆 / 経済大恐慌は来るか？ / 後の雨が今降っている？
第6号 1990年10月発行
最後のあがないの働き - 理解の重要性 / 聖所としての人間 / ビリー・グラハムと法王教 / キリストと努力 / 真理の宝石 / サムソン - SDAに何を教える？ / 質問：バプテスマ - 人数増加について / 小食 - 過食 - エジソン
第7号 1991年1月発行
選民を感嘆さんと / ジニーン・ソートロン「夢と幻」 / 偽りの預言者、心の黙示 / バプテスマのヨハネとヘロデ
第8号 1991年6月発行
アドベンチストの最重要教理 / 破壊せよ、その基までも / 再臨信仰を破壊する企て / 生ける者のさばき / ダニエル 11章 - 「新しい世界秩序」への激動 / オーバス・デー・ローマ法王教のマフィア
第9号 1991年10月発行
イエスあるがままの真理 / しかし、暖かな愛、喜び、平和はなかった / ダニエル 11:40-45の研究 / 激動の嵐 - 最後の戦い / 宗教パワーと世界政治
第12号 1992年2月発行
セブンスデーアドベンチストと踊り / 信仰と行い / 最後の戦い / ダニエル 11: 40- / 宗教パワーの台頭 / 多教派を真似る
第13号
預言の書 - 雅歌の研究の重要性 / キリストの先在 / 宝石、装飾品類 / 研究 - ダニエル書 11:40- / ヨーロッパ統合は成るか？ / 質問 1ペテロ 3: 18-22
第14号
変革時代のアドベンチズム / アドベンチズム (再臨運動) の変化 / 異宗婚委員会への反論 / ユダヤ人はなぜイエスをメシヤとして拒んだか？ / 連載ダニエル 11:40- 「終わりの時」 / 眺めること - 精神の法則 / 伝道に新しい動向？ラオデキヤに大変化 / イエズスの影響？
第15号 1994年12月発行
特集 - 聖書翻訳の流れ / どの聖書を選べばよいか？ / 別冊：新共同訳に対する意見書
第16号 1995年6月発行
連発する諸事件の意味 / ヨシヤ記のポイント / 聖書に対する闘争
第17号 1996年5月発行
新共同訳は「より良い聖書」か？
第18号 1996年8月発行
各時代のカインとアベル / 預言の霊より参考引用文
第19号
パチカンが進化論認める - その意味 / SDAにおける進化論の流行、風靡 - その意味 / 6000年の地上歴史 / 背教のアルファとオメガ / 「1888年のメッセージ - 信仰による義認」グナム島セミナーに参加して
第20号
迫りくる戦い / 敵を知る / 時を知る / 備えを知る
第21号
天路歷程最終の道標 / キリスト再臨接近のしるし / ダニエル書研究の重要性 / マリアン・ベリー / ダニエル 12章の警告 / マリアン・ベリー
第22号
賢い者は悟るでしょう / タイムライン (時刻表) はどのように始まり終わるか？
第23号
アドベント (再臨) への待望は大失望になり得る！ / 紀元二千年コンピューター問題とキリスト品性の完成 / 法王、

日曜休業令のための舞台装置をする！ / ライ病人村
第24号
警告無視の悲惨 / ダニエル 12章に関する議論 / 世界総会聖書研究所の論評に対するマリアン・ベリーの返答 / 1999年第一期の日本語安息日学校教課について / 読者からの便り
第25号
西暦 2000年を迎えるにあたって / クリスマスに思う / 確かな天声 - 預言の声 - / 真理の宝石
第26号
待望の聖書「スタディバイブル」 / 人間の像 / 二つの冠
第27号 2000年12月発行
キリスト品性の完成を信じる者は完全主義者か？ / ローマ・カトリックは変わったか？
第28号 2002年3月発行
星 (ひかり) に導かれて / ニューヨークテロ事件で見た恐怖と希望 / 鳥かごとイエスのあがない / 証
第29号 2002年12月発行
注目されるオリオン星座 / 上を見上げなさい / 十字架を掲げよ！ / アザゼルのやぎ / ふたたび神の宮となるために
第30号 2003年4月発行
紅海横断の真実 - 考古学が明かす驚くべき発見！ / 世界を湧かせる映画「ハリ・ポッター」大衆を魅惑する現代心霊術！ / ただ師匠を見つめて / イエスを仰ぎつつ
第31号 2003年9月発行
どれが本当のシナイ山か？ / 隠れた世界最大のテロ集団とは？ / なぜ、私はセブンスデーアドベンチスト改革教会に加わらないか？
第32号 2004年1月発行
真の医事伝道に生きて (自然療法) / 灰の都市、ソドム・ゴモラの発見！ / ついに動き出したアメリカ国主義 - 20ドル紙幣の真相？
第33号 2004年8月発行
おとずれの時を知る / 小さな光と大きな光の意味 / 世界貿易センターの襲撃 - その歴史は動いた / イエズスの狙い
第34号 2005年2月発行
海と大波のとどろき / 小さな光と大きな光 2部 / 礼拝と音楽 / 暗黒の勢力を打破する
第35号 2005年6月発行
新法王選出の意味 / 神の大時計 / 預言の研究と信仰 / 悪霊との戦い
第36号 2005年12月発行
終末のしるしの急カーブ / 十字架の勝利 / 品性の耐震強度 / 法王制の最終時代 / 黙示録の研究で覚えるべき重要なポイント
第37号 2006年6月発行
米国「十戒デー」祝典の意味 / 新共同訳についての世界総会などのやり取り - そのいきさつ / 預言の霊は現代医学の100年も先端に行く / パイナップル・ストーリー
第38号 2006年12月発行
イエスを見失った SDA？見ざる、聞かざる、言わざる大真理 / 神の居住地 - 宣教師の散々の試練 / 終末時代のパワーとしてイスラムは登場するだろうか？ / 預言されているだろうか？
第39号 2007年6月発行
聖書における女 Part1 / キリスト再臨の時を探る / 罪はどのように処理されるのか？ / 小石の波紋
第40号 2008年6月発行
ああ、恵み、我にさえ及べり / 神様の学校 - 権利の放棄 Part 2 / デジタル社会の再臨信仰 / マザー・テレサ 40年間の信仰の危機 / 法王ベネディクト 16世の宣言
第41号 2008年12月発行
メガチャーチ (巨大教会) についての考察 / 天下分け目の大決戦！ / 七つの封印 / 王家の紋章
第42号 2009年1月発行
アメリカに変化「日の出」の時が来たか？！ / マタイ 5章 48節 - 完全について / 古代エジプト史におけるヨセフ
第43号 2009年6月発行
創造主の一大傑作 - 人間 / 世界総会におけるピアソン総理の最後の辞 / ゴスペルという名の策略 / イエズスの日本戦略 / エディ婦人とジャックじいさん
第44号 2010年1月発行
荒らす憎むべきもの / 「各時代の対立闘争」にあっばれ！ / オバマ大統領と法王ベネディクト 16世の会見の意味 / 賢者への言葉 / 背教のオメガ

第45号 2010年7月発行
我が波乱万丈の人生 / 大いなる像とは何か？ / 2010年春のセミナー報告 / 第59回セブンスデーアドベンチスト世界総会 / 私のチルドレンを吹き飛ばして下さった神様
第46号 2011年1月発行
セブンスデーアドベンチストの存在理由 - 最後の願い - / 世界支配を狙う二大勢力 / 聖なる御言葉の歴史と移行 / ケログ博士の歴史「背教のアルファ」
第47号 2011年7月発行
立ち返れ日本！創造主に！東日本大震災？頻発する災害の意味！ / 「キリストとサタンの大争闘」のお薦め / 贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き！ / 論点 / 「春の祈禱週読み物 (2011年)」を読んで感じたこと / 黙示録の研究 7つのラッパ / ジェレミーとラバたち / 銀細工師の物語
第48号 2011年12月発行
クリスマス由来異教からカトリックへ、そして全世界へ / 新興教会 (エマージング・チャーチ) と霊性形成 (スピリチュアル・フォーメーション) / ささまざまな教会成長論の波 / 経済危機 / 意志？我々の選択、神の力 / 東日本の石が叫ぶ！大震災から学ぶ
第49号 2012年8月発行
近年の驚くべき考古学的発見！ / 信仰によって進む / 信仰による義認と第三天使の使命 - 第一部 - / 一つの石もほかの石の上に残されず / あしあと / 他
第50号 2013年1月発行
グローバリズム / 人の子の時に同様なことが起こるであろう / 真の清め / 三天使の使命 第二部 / 罪深き独立
第51号 2013年7月発行
時のしるし！新ローマ法王選出 / 大秦景教流行中国碑の真実 / 本能寺の変とイエズス会 / 日本人がキリスト教を受け入れにくくなった原因 / 我らの大祭司、諸王の王「イエス・キリスト」を仰げ！ / 当面している危機 / 平和をもたらす道 / 驚くべく、くすしく創られた / 神の愛によるいやし
第52号 2014年1月発行
聖書の預言とニュース / アメリカの常識の変貌 / 終末の前兆 - 預言のアウトライン / 生ける者のさばきと後の雨の関係 / 主の幕屋の中へ / 勝ち誇る真理
第53号 2014年8月発行
驚くべき預言の成就 / 罪の除去 / 憂なる神の罪の処理のしかた / 船は無事に目的地に着くか？ / ビル・ヒューズ牧師による講演のダイジェスト
第54号 2015年1月発行
大医師イエス / 聖書から見るエジプト考古学 / 終わりの時はいつ来るのか？ / 増し加わる光
第55号 2015年8月発行
立ち上がるトマス / エレン・ホワイトとヨハネ / E. G. ホワイトとは誰か？ / イスラムとカトリックのつながり / 女性挨拶礼 / 個性の発達
第56号 2016年1月発行
第二次世界大戦 / 第三次世界大戦が始まった！？ / 底いも知られぬ人の罪 / 御業完成の鍵 / 後の雨 / 大いなる叫びに含まれる経験 / 創造主の傑作 恐竜！！
第57号 2016年7月発行
地震災害は何を意味するか？ / 巡礼者たちの煩悶 / 完全論へのつまずき / 日本三文豪の煩悶
第58号 2017年1月発行
トランプ米大統領誕生の意味 / 取り戻そう！健康長寿 沖繩 / 歩く運動の効用 / つむじ風を刈り取る / 讚美歌に見る「靈魂不滅思想」
第59号 2017年8月発行
良心の自由の危機か / ネルソンの貢献 - 日本国憲法 / ジグソーパズルから学ぶ教訓 / アドベンチズムの動揺

サンライズミニストリーについて

サンライズミニストリーは、沖縄県今帰仁村に位置し、書籍やメディア、セミナー等を通して現代の私たちに必要な使命を伝えるキリスト教伝道機関です。当機関では、永遠の福音社 - EGPA (韓国) を通じて 2000 年に「スタディバイブル日本語版」を発行し、日常生活や健康に関する書物、賛美歌 CD やメッセージの CD / DVD を発行しております。混迷する世界情勢の中で、私達は確かな光を必要としています。聖書の預言の光だけが私達に希望を与えます。「主とその恵みの言葉」に鑑を下るして最後の時代を生き残り、主イエスの再臨に備えましょう。また無料小冊子も多数配布しております。

書籍案内



歴史と聖書の預言

各時代の争闘 E・G・ホワイト

1冊で 950円/冊
10冊以上で 850円/冊
50冊以上で 650円/冊
100冊以上で 500円/冊

商品番号:B20-4 A5サイズ

「各時代の争闘」の再版で、カラーの写真、絵入りの、読みやすい新しいレイアウトです。現代の真理の書籍中、最も重要なこの本に至るところで秋の木の葉のように散らしましょう。あらゆる欺瞞の中にある現代人に正しい識別力を与え真の希望を与える必読の書。

讃美歌集&CD 契約の虹

讃美歌 160 選



商品番号:B70-1 A5サイズ、歌集 1,600円
:C70-1 CD8枚組 4,000円
:BC70-1 歌集&CDセット 5,000円

日本基督教団讃美歌、聖歌、リバイバル聖歌、他から160曲を選びました。音程が高い調は低くして歌いやすくしています。全160曲を収録した音楽CDもあります。

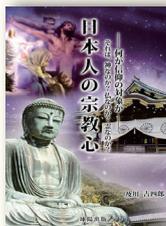


人類救済の神の計画とその象徴的模型としての聖所

及川 吉四郎 500円

商品番号:B12-5 A5サイズ

クリスチャン品性の完成という目標、理想と現実の狭間からついに天の至聖所に解決の光りを見出した著者の体験を綴った本。大失望のどん底から喜びと希望と確信を与えた同じ探求が大試練を乗り越えるより大なる喚起に導く!



日本人の宗教心—何が信仰の対象か

及川 吉四郎 1,500円

商品番号:B13-3 A5サイズ

日本人は多民族、宗教も多宗教、「ごっちゃませ宗教」「チャンポン神」と著者は言うてはばかりません。日本の神道、仏教がいかに変容して来たかに特にメスを入れ、聖書の絶対唯一、創造神に立ち返る以外に救いはないと著者は訴えています。



MISSION PILOT ミッションパイロット

アイリーン・ラントリー 650円

商品番号:B50-1 A5サイズ

“MISSION PILOT”は神様の偉大な働きと導き、デイビッド・ゲイツ夫妻の人生への神様の驚くべき介入を世の人々に叫んでいます。



現代の真理

500円

商品番号:B41-1 A5サイズ、168頁

現代の真理

この本を正しく研究するなら、再臨信徒の困惑を整理し、魂の飢えを満たす。終末事件の研究から、今がその時であることを知る。さまざまな教理の風に吹きまわされないために、正しく理解する必要がある。



音声聖書 (Audio Bible) (現在は新約のみ) —ペン型音声読み取り式聖書 (スピーカー内蔵)

19,000円

大きさ:幅25×高さ156×奥行き25(mm)

四福音書は11言語対応 日本語は口語訳聖書で収録。単4電池2本使用。録音機能付き(覚えたい聖句を録音すると暗唱聖句もらくらく) 使い方は簡単。スイッチオンして、付属のシートにある読みたい聖書の章をペン先でタッチするだけで音声自動再生されます。イヤフォンも使えるので、電車の中などの公共の場所でも大丈夫。各章ごとの読み取りなので、どこからでも始められます。

興味のある方はこちらまで

お問い合わせ先 / Contact

金森 豊

〒503-0116 岐阜県安八郡安八町大森 347 TEL: 0584-64-3614 E-mail: john316ae@herb.ocn.ne.jp

SUNRISE MINISTRY キリスト教伝道機関
サンライズ ミニストリー刊行誌

〒905-0428
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
E-mail: contact@srministry.com
郵便振込番号: 02080-0-12121
サンライズミニストリー

www.srministry.com
TEL (0980) 56-2783
FAX (0980) 56-2881

Anchor

アンカーNo.60
発行人 金城 重博